

平石遺跡発掘調査概要・I

—中山間地域総合整備事業「南河内こごせ地区」に伴う—

2007年3月

大阪府教育委員会

は　じ　め　に

大阪府河南町平石谷一帯の中山間地域総合整備事業に先立ち、平成11年度に事業対象区域の埋蔵文化財の有無を確かめるため、谷の両岸で100箇所余りの地点にわたり試掘調査を実施した結果、平石遺跡の存在が確かめられました。今回の調査は、遺跡のより詳しい内容を把握するため、整備事業で削り去られる予定の地点を中心に調査区を設定して実施しました。調査の結果、平安時代から南北朝時代を中心として、その前後の時代も含めた遺構や遺物を発見することができました。当地は正平15年（1360）に將軍足利義詮の焼き討ちの際、奈良時代以来続いた高貴寺の広い寺域の堂塔の多くが灰燼に帰し、以後は耕地開墾の波に洗われたといわれています。その様子は今回の調査にも現れ、現集落に接する安定した土地には開墾以前の建物の一部も残っていました。このことは平石の歴史の移り変わりを考える新たな材料といえるでしょう。

調査に際しては、平石地区をはじめとする地元の皆様ならびに関係機関に多くのご協力いただき、深く感謝いたします。今後も文化財保護について地元の方々や広く府民の皆様にご協力をお願い申し上げます。

平成19年3月

大阪府教育委員会
文化財保護課長 丹上 務

例　　言

1. 本書は、中山間地域総合整備事業「南河内こごせ地区」に伴う、南河内郡河南町所在平石遺跡の発掘調査（05028）概要報告書である。
2. 調査と遺物整理は、大阪府環境農林水産部の依頼を受けて大阪府教育委員会が実施した。
3. 調査は、文化財保護課調査第二グループ主任技師枡本哲を担当者として、平成17年8月より平成18年3月まで行った。遺物整理は、調査管理グループ主査三宅正浩・技師藤田道子を担当者として、平成19年3月まで行った。
4. 本書に使用した座標値は世界標準座標値で、括弧内には国土座標第3系（日本測地系）の数値を書き加えた。方位は座標北、標高はT.P.プラス数値で示している。特に必要な場合は磁北の表示を加えている。
5. 航空写真は、株式会社アコードに委託して実施した。なお、撮影フィルムは同社において保管している。
6. 遺物の写真撮影は（有）阿南写真工房に委託して実施した。
7. 発掘調査および遺物整理・調査概要の作成に要した経費は、農林水産省の補助を受けた大阪府環境農林水産部と文部科学省の補助を受けた大阪府教育委員会が負担した。
8. 本書は、枡本が編集し執筆した。
9. 概要是、300部作成し、一部あたりの単価は798円である。

本文目次

はじめに

例　　言

第1章　調査の経緯と方法	1
第2章　調査の結果	6
第1節　左岸の調査区	6
第2節　右岸の調査区	17
第3章　まとめ	38

挿図目次

第1図　平石谷遺跡分布図	1
第2図　南河内こごせ地区事業位置図	2
第3図　調査区位置図（1／2500）	3
第4図　調査地の小字分布図（1／2500）	4
第5図　河南町周辺の街道	5
第6図　第1～3区土層図（1／80）	7
第7図　第5～11区土層図（1／80）	10
第8図　第2区出土遺物実測図（1／1・1／4）	11
第9図　第12～18区土層図（1／80）	13
第10図　第19～25区土層図（1／80）	15
第11図　第26～37区土層図（1／80）	18
第12図　各調査区出土遺物実測図（1／4）	19
第13図　第38～41区土層図（1／80）	23
第14図　第38～40区遺構全体図（1／200）	24
第15図　第41区遺構全体図（1／200）	25
第16図　第38～40区建物・土坑9平面・断面図（1／50）	26
第17図　第38～40区土坑・ピット平面・断面図（1／10, 1／50）	28
第18図　第38～40区溝・ピット・土坑断面図（1／20）	29
第19図　第38～41区出土遺物実測図（1／40）	30
第20図　第38・44～47-A区、他土層図（1／80）	35
第21図　出土石器実測図（1／1）	37
第22図　『河内名所図会』所収の高貴寺周辺図	39

表 目 次

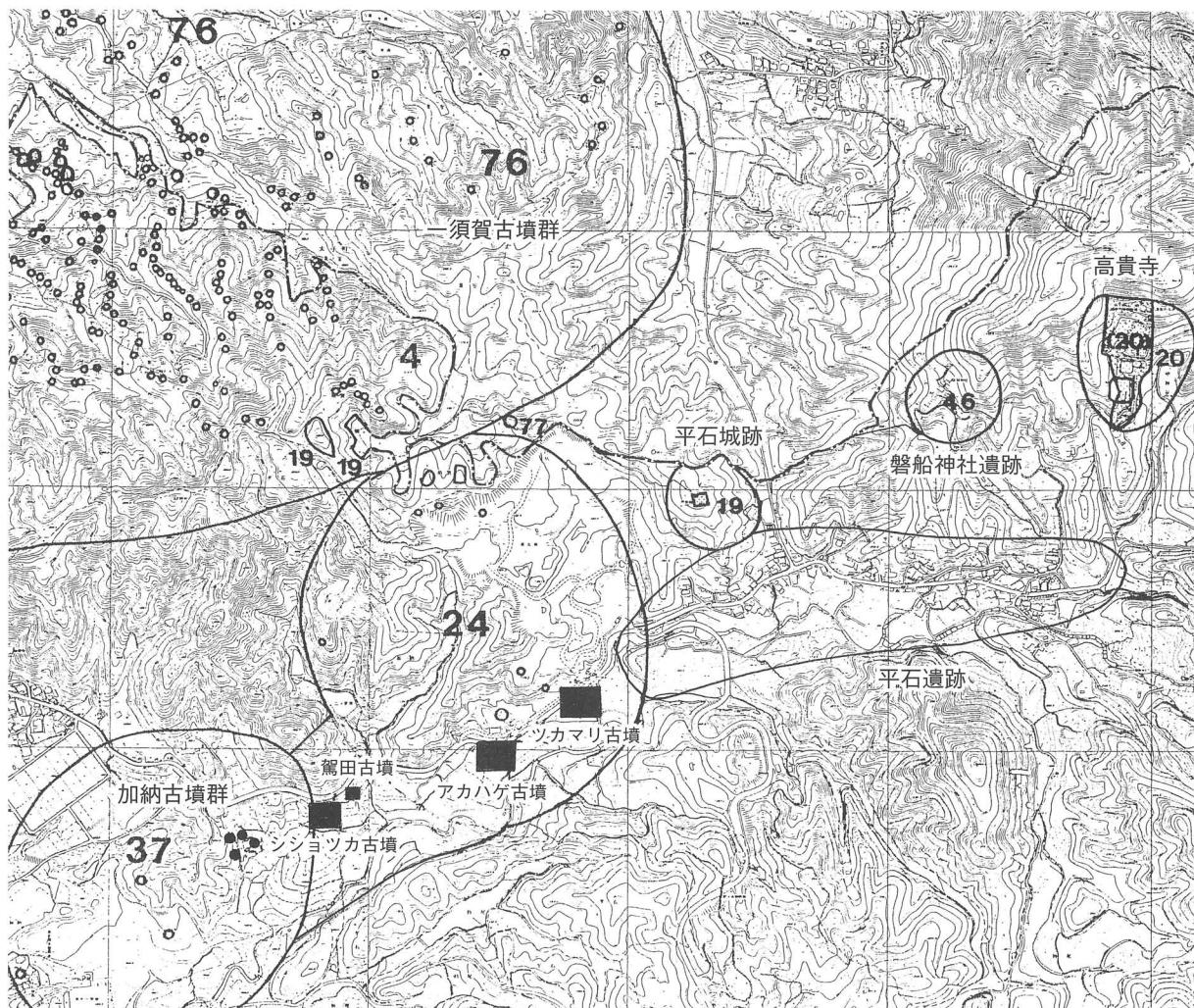
第1表	第2区出土錢貨法量	8
第2表	第38～41区検出遺構一覧表	31
第3表	出土石器法量	37
第4表	出土土器・土製品観察表	42

写真図版目次

図版1	調査地点全景（空測写真、俯瞰）
図版2	調査地点垂直写真（平成11年度撮影）（38～40区）
図版3	調査地点垂直写真（平成17年度撮影）（38～40区）
図版4	調査地全景
図版5	第2区
図版6	第3区
図版7	第4区
図版8	第5区
図版9	第6区
図版10	第9区
図版11	第10・15区
図版12	第16・19区
図版13	第21・22区
図版14	第23区
図版15	第31・33区
図版16	第36区
図版17	第37区
図版18	第38～41区（1）
図版19	第38～41区（2）
図版20	第38～41区（3）
図版21	出土遺物（1）
図版22	出土遺物（2）
図版23	出土遺物（3）
図版24	出土遺物（4）
図版25	出土遺物（5）

第1章 調査の経緯と方法

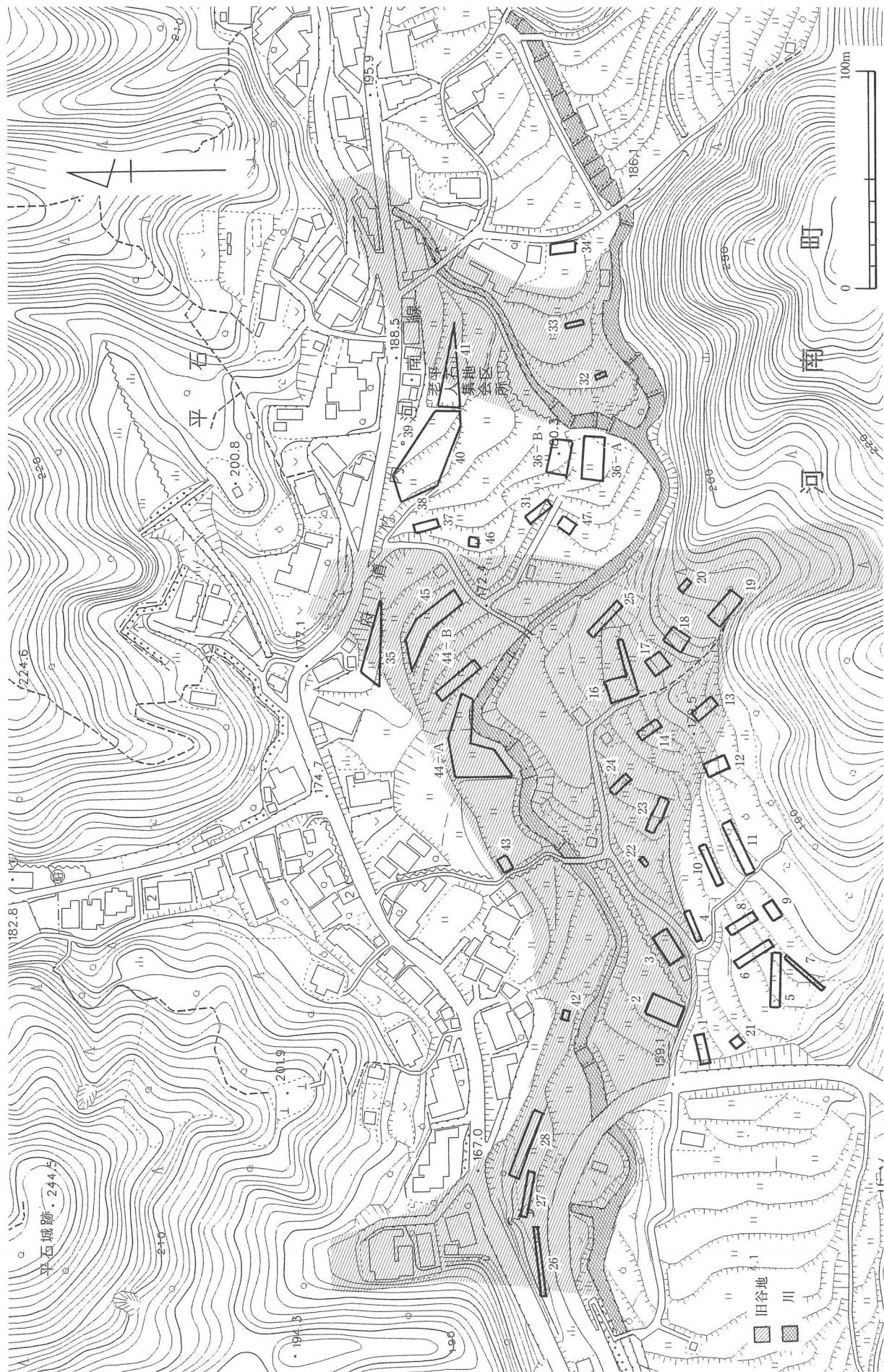
今回の調査対象地は、平石集落の南側の平石谷両岸一帯で東西約450mの範囲である。集落を東西に抜ける旧道は東行し、平石峠を経て大和当麻へいたる旧道となっている。この道より南側、平石谷に下る右岸の棚田と、左岸は持尾山塊の北斜面から谷間に開ける棚田が調査対象となる地目である。調査は、新しいほ場の造成工事で切土となる箇所をトレーニチ方式で実施することとなった。その結果、左岸では25箇所、右岸では19箇所の調査区を設定した。調査区の呼称は工事請負設計図面をそのまま用いた。調査途上、ほ場整備事業主体である本府環境農林水産部より、一部のほ場整備対象となっていた地区が事業から急遽外されることになったとの連絡が入った。そこで既に設定していたそれに該当する調査区（第29・30区）を調査対象より除外し、これらの調査区番号を欠番とした。本書に掲載した断面図には原則として現在の耕土を除去した面以下の堆積土を図示している。したがって最上層の数値に0.2~0.3mを加えた数値がほぼ現耕土上面の標高値となる。



第1図 平石谷遺跡分布図



第2図 南河内こごせ地区事業位置図





第4図 調査地の小字分布図（1/2500）



第5図 河南町周辺の街道

第2章 調査の結果

第1節 左岸の調査区

左岸は持尾山塊の北斜面で、ここには北の平石谷に向かって張り出す尾根が数箇所あり、尾根と尾根の間に北または北西に延びる谷地形が形成されている。調査対象となる範囲では西から「菖蒲谷」、「向山」、「ムレ山」といった小字名が地籍に残る。設定した調査区ではこれらの尾根の稜線、その間の谷地などの棚田造成以前の地形や、棚田造成に伴う切土、盛土の様子が堆積土の観察によって知ることができた。

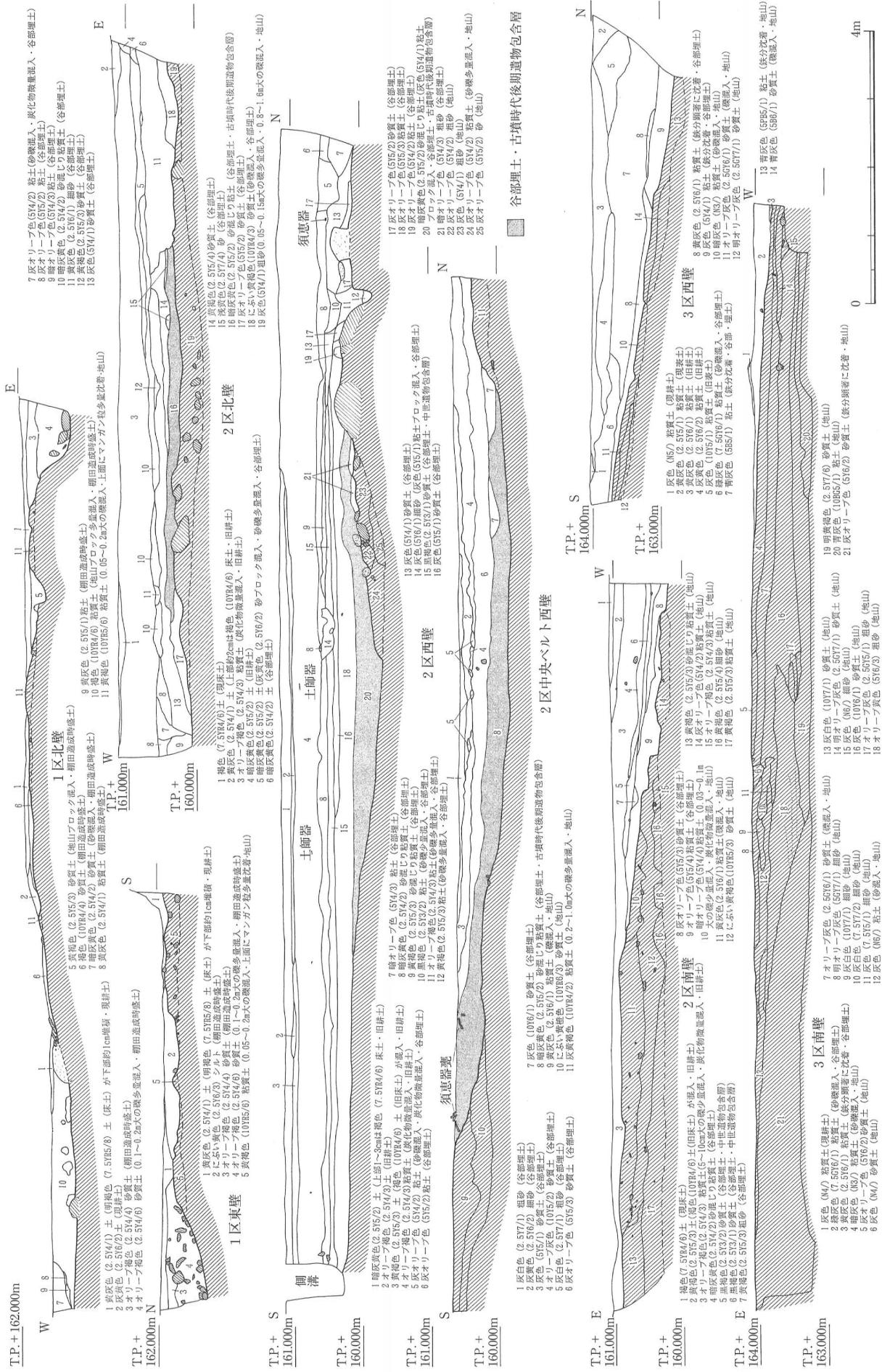
第1区（第12図12・13）

「菖蒲谷」の尾根の北西に延びる斜面には、現在のグリーンロードまでの間に10枚の棚田が築かれている。その最も低い地点（T.P.161.5～161.9m）に東西13.0m、南北6.0mのトレンチを設定した。厚さ0.2mの現耕土を外すと、北東部では地山の黄褐色粘質土が露呈する。地山は北西部に向かって低くなり、この低いところに棚田造成の際の整地土が数層堆積している。地山には露出した部分で0.3～0.6m規模の石が含まれ、北西部の低い個所を埋めた土には地山より遊離した0.1～0.4mの石が含まれている。地山面で遺構検出を行ったが、現耕土に伴う耕作溝の一部以外に遺構と認められるものはなかった。棚田造成時の整地土である第6～10層より、土師器、須恵器その他中世土器が出土したが、図化できたのは土師質・瓦質羽釜（12・13）のみである。

第2区（第8図1～11）

第1区北側の東西に通る里道を挟んだ棚田に、南西より北東へ長さ16.0m、幅10.0mにわたって設定したトレンチである。この地点の標高はT.P.161.1mを測る。旧地形は南から北へ下がる谷地形をなし、南では現耕土の下に地山が露呈し、北では0.6mの厚さの古い耕土、床土からなる中世から近世・近代にかけての棚田盛土の堆積（北壁断面第1～15層、西壁断面第1～18層、南壁断面第1～8層）が認められ、その下には棚田造成以前に自然の営為によって谷地に流れ込んだ砂、礫、砂質土、粘質土が堆積している。つまり、自然堆積層によって谷地が埋没し、谷の窪地がある程度解消されてから棚田の造成が始まるようである。無遺物層の砂層を地山と捉えたが本来はこれも流土のひとつで、0.1～1.0mの大小の石が多量に含まれ、土石流の様相を呈している。

この調査区では新旧の耕作土に伴う溝以外、顕著な遺構は検出されなかつたが、南半東寄りの、 $X = -166.958 \sim 62$ 、 $Y = -31.541 \sim 43$ の範囲では須恵器甕の破片がまとまって出土した。この須恵器の出土状態を把握するために北東～南西方向に、トレンチ長辺に平行する形で土層観察用ベルト（中央ベルト）を残した。それによるとトレンチ南壁付近で高く比較的安定した地山が認められ、その上に最初に堆積するのがこの須恵器を包含する暗灰色砂混じり粘土（南北トレンチ西



第6図 第1～3区土層図 (1/80)

壁断面第8層)で、北壁断面で第16層、西壁断面では第20層が相当する。須恵器は、南西の第1区を設定した「菖蒲谷」の北西裾付近から、当調査区に向って地山の低所に粘土が流入する過程で混入し、そのままパック状態となったような印象を受ける。遺物は、第3層より古式土師器片が出土したほか、上記の暗灰色砂混じり粘土より須恵器甕、それより上位の棚田造成土より土師器、須恵器、瓦器、土師質・瓦質土器、陶磁器、瓦、サヌカイトが出土した。須恵器甕(2)はほぼ1個体に復原でき、摩滅の形跡もほとんど認められない5世紀前半の器である。棚田の耕土には6、7世紀から13世紀におよぶ土師器、須恵器、黒色土器、瓦器、土師質・瓦質土器、陶磁器、サヌカイトなど(3~10)が図化できた。また旧耕土中より銅銭3枚が锈着した状態で出土した。「至元通寶」のみ確認できるが、他の2枚は不明である(11)。

第1表 第2区出土銭貨法量

挿図番号	遺物番号	出土層	径 (mm)		方孔 (mm)		厚さ (mm)	重量 (g)
			縦	横	縦	横		
第8図	11	旧耕土	23.76	23.89	5.78	6.09	3.60	6.76

※厚さ・重量は「至元通寶」のほかに锈着する2枚を含めた数値。

第3区(第12図14)

第2区の北側の1枚上の棚田(T.P.163.7~163.8m)に東西方向に設定したトレーニチである。幅7.0m、長さ16.0m。地山(西壁断面第10~14層、南壁断面第4層以下)面は北から南へ比高0.6mを以て急傾斜面をなす。その上に鉄分の沈着が著しい粘土が厚く堆積し、さらにその上に中世耕作土と考えられる粘質土が堆積している。地山は南の山手より繰り返し流土があったことを示している。棚田は、その粘土の自然堆積後に形成された水平に近い上面に盛土し、平坦にすることで確保されている。遺構は検出されなかったが、棚田造成以前の堆積土(西壁断面第1~5層)より土師器、須恵器、土師質土器(14)、サヌカイトが少量出土している。また現耕土除去後の面で銅銭1点が出土したが、腐蝕のため銭種は不明である。

第4区

第3区北側の里道を挟んだ標高T.P.169.2m付近に設定した、幅2.0m、長さ15.0mの東西トレーニチである。現耕土を除去すると旧耕土を介して中世耕作土と考えられる粘質土(東壁断面第4層、西壁断面第3層)となる。その下の地山(東壁断面第5層、西壁断面第5・6層)は南東から北西へ急激に落ち込む。棚田はその深く落ち込む北西方向へ厚い盛土を施し、それによって狭い平坦な面を確保して築かれている。遺構は検出されなかった。遺物は、中世耕作土より出土した少量の土師器、須恵器、磁器がある。

第5区（第12図15・16）

「菖蒲谷」の尾根北西部のT.P.173.4～176.7mの傾斜面に築かれた2枚の棚田に対してほぼ東西方向に設定した幅4.0m、長さ25.0mのトレンチである。地山面の標高はT.P.176.2～173.8mと東から西へ下る。比高は2.4mである。地山面には中世の耕土となっていた粘質土が数回にわたって盛り上げられ、古い棚田を拡張していった様子が観察された。これらの造成土から土師器、須恵器、瓦器、磁器が少量出土した。図化できたものとしては10世紀中頃の土師質皿（15）、13世紀代の瓦器椀（16）がある。その他に遺構は検出されなかった。

第6区（第12図17～21）

第5区を設定した棚田と同じ棚田に対し、その東側に南北方向に設定した幅4.0m、長さ19.0mのトレンチである。現耕土以下の堆積土の状態は第5区とほとんど変わらない。地山面の標高はT.P.173.4～176.6mと、南から北へ比高3mを以って傾斜する。このトレンチでは第5区よりも棚田造成の特徴がよく現れている。それは、南から北へ続く3枚の棚田のうち、北側の2枚の境は1.0mの段差をつけて地山を平坦に削っていること、またおそらくその削った地山の土を今度は南側2枚の田の境をつける際に盛土して北側へ拡げたらしいこと（たとえば、中世耕土をブロック状に混入する第7層）、などである。

遺構は検出されなかったが、以上の棚田造成盛土中より古式土師器、土師器、須恵器、瓦器、土師質土器、陶磁器などが出土している。古式土師器は布留式甕（18）で、その他には8世紀代の須恵器（17）、13世紀後半～14世紀前半の瓦器椀（20）、15世紀中頃の土師質擂鉢（19）などが図化できた。

第7区

第5、6区の南端に接して、北東～南西に設けられた幅2.0m、長さ23.5mのトレンチである。標高はT.P.175.9～176.6mを測る。厚さ0.2～0.3mの盛土を除去すると、粘質土の地山が露呈する。西端は一枚下の棚田の造成の際に0.5m低く削り取られている。遺構は検出されなかった。盛土より瓦質土器、サヌカイトが少量出土した。

第8区（第12図22、23）

第6区の東に25m隔て、それに平行して設定された幅4.0m、長さ15.0mの南北トレンチである。標高はT.P.173.9～176.6mである。厚さ0.1m内外の薄い表土あるいは0.2mの現耕作土を剥ぐと、旧耕土、床土が現れる。トレンチ中央のT.P.174.2～174.6mでは数層の中世耕土層（第4、6、13、14層）が観察された。ここではトレンチは3枚の棚田にかかるが、北側2枚の棚田の断面には、下の棚田の北端に地山を削ったブロック状態の土を積んで、嵩上げし、上の棚田の平坦面を北へ拡張した様子が現れている（第13層）。遺構は検出されなかった。中世耕土より土師器、須恵器、

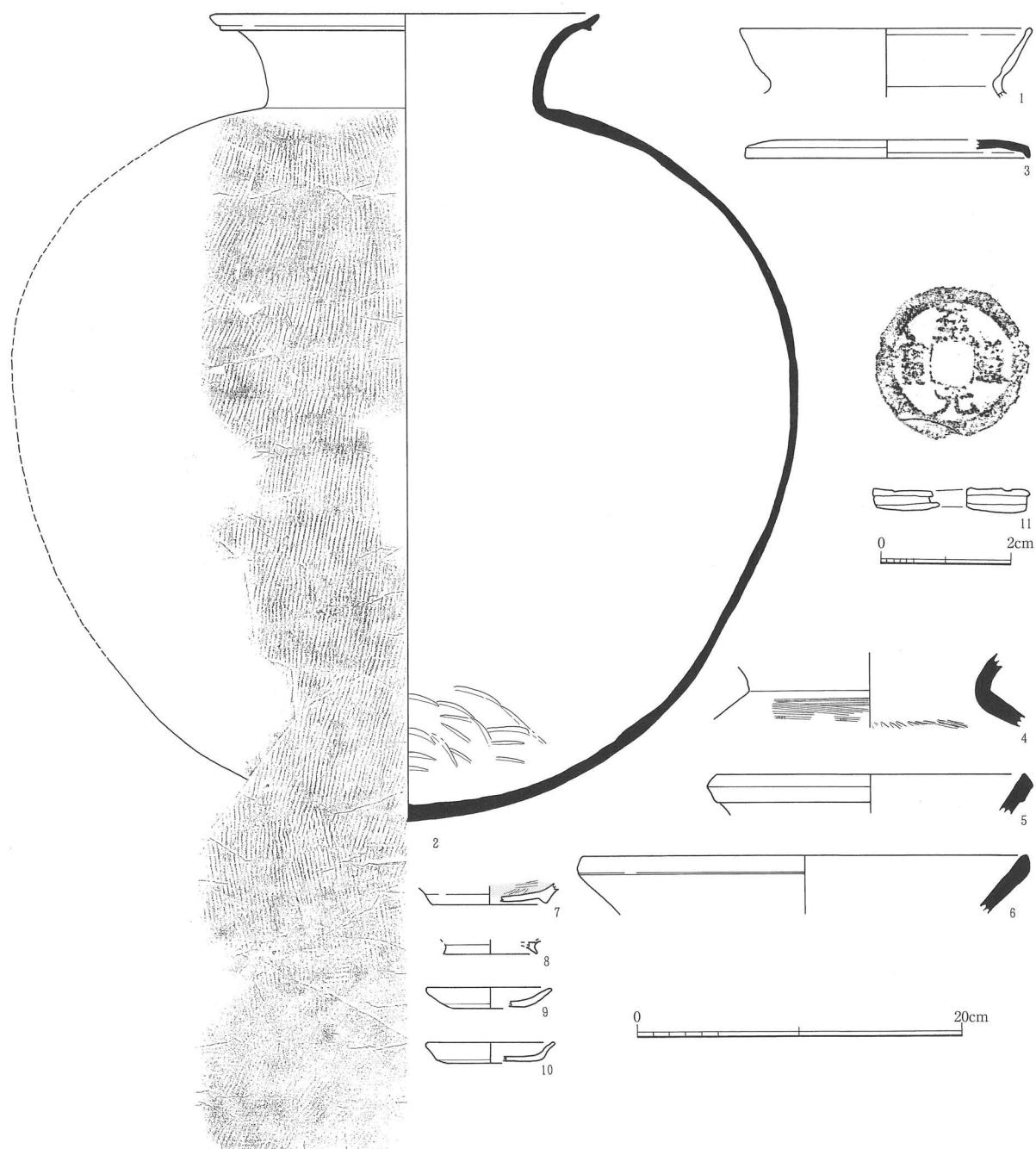


第7図 第5~11区土層図 (1/80)

瓦器、また旧耕土からは磁器などが少量出土した。図化できたものには土師質小皿（22）、須恵質鉢（23）がある。

第9区（第12図24～38）

第8区の北の2段上の棚田であるが、現状は放置された状態で腐植土の表土が被っていた。5.0×8.5mの北東～南西方向のトレンチを設定した。標高はT.P.177.5mから178.3mで、薄い表土を剥がすと新旧の耕土の堆積がみられる。トレンチ北端のT.P.177.0mの地山上には厚さ0.2mの中世耕土の残りが見られた。遺構は検出されなかった。遺物は、中世耕土より土師器、須恵器、土師質土器、サヌカイトが出土した。10世紀中頃～11世紀代の土師質小皿（26～33）、12世紀末～



第8図 第2区出土遺物実測図（1／1・1／4）

13世紀初の須恵質鉢（25）、瓦器小皿（36、37）、13世紀中頃～14世紀前半の瓦器椀（35）、15から16世紀の土師質甕（34）などが図化できた。山裾に接するこの地点で中世遺物が比較的多く検出できたことは注目される。

第10区

第9、10区の東を南北に通る里道を挟んだ反対側のT.P.174.8mの棚田に設定した幅3.0m、長さ20.0mのトレンチである。鉄分の沈着する堅く締まった地山の砂質土上に粘質土を盛り上げて棚田としている。中世耕土はない。遺構は検出されなかった。棚田造成土と考えられる若干炭を含む土層（東壁断面第3・4層、西壁断面第2・3層）より土師器、須恵器、瓦器が少量出土した。

第11区

第10区の北の1段上のT.P.178.8～179.9mの棚田に東西方向に設定した幅3.0～5.0m、長さ25.0mのトレンチである。表土である腐植土、現耕土を外すと、旧耕土・床土の堆積が認められ、その下には地山面上にはじめて棚田が造成された中世耕土（東壁断面第8～10層、西壁断面第3層）が存在する。地山面は南から北へT.P. 179.2～177.6mと比高1.6mを以って傾斜する。遺構は検出されなかった。中世耕土より土師器、須恵器が少量出土した。

第12区（第12図39）

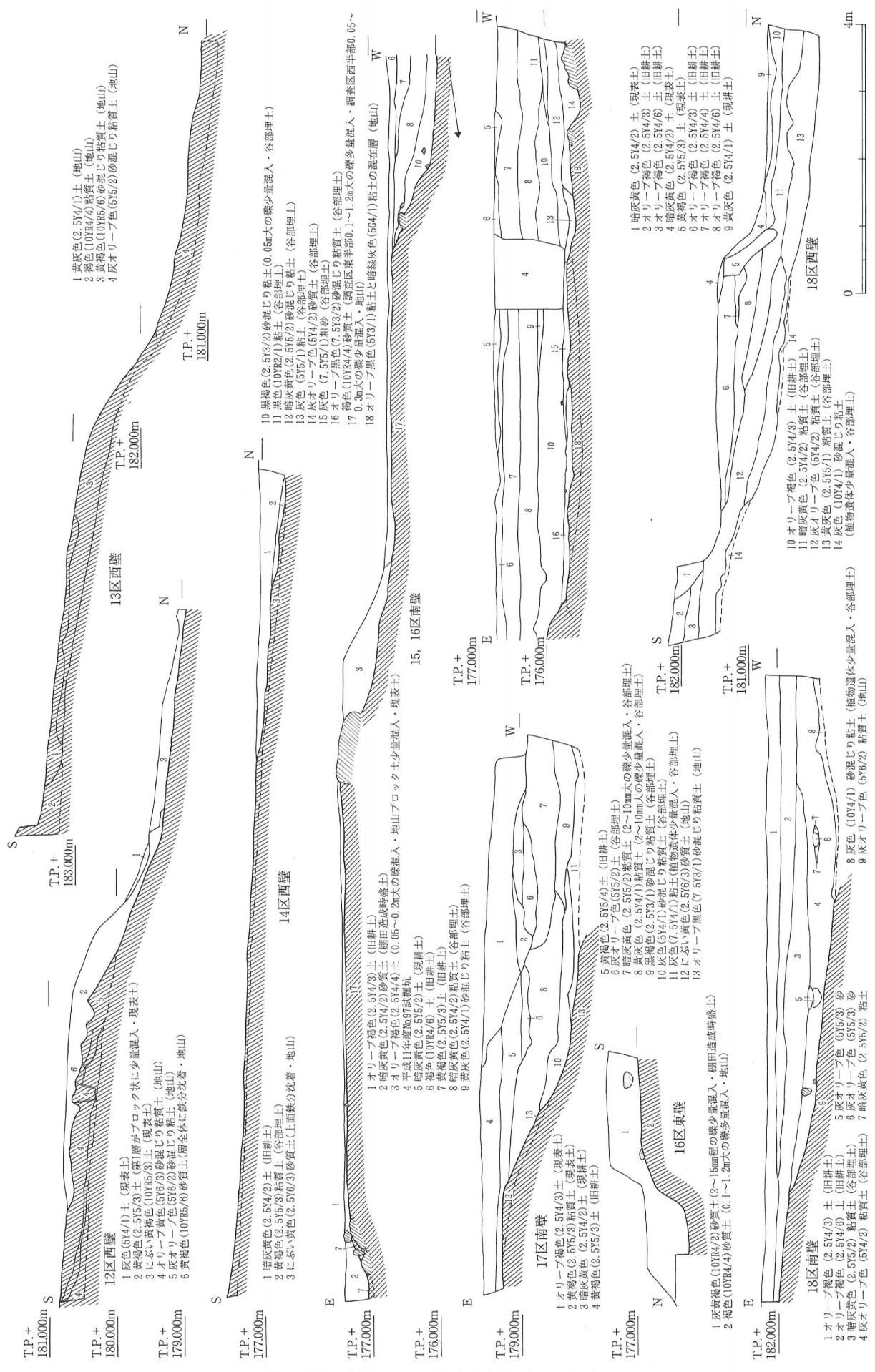
第11区の東側に接して南北方向に設けた幅6.0m、長さ11.0mのトレンチで、この個所の標高はT.P.179.0～180.8mを測る。表土となる腐植土を外すと、粘質土、粘土の地山面となる。地山面での高低はT.P.180.8～179.0mである。地山構成土（第4～6層）は斜面堆積を示している。この個所では中世に遡る耕土は認められず現耕土のみである。遺構は検出されなかった。遺物は、表土より瓦器、瓦質土器、サヌカイトが少量出土した。瓦器小椀（39）が図化できた。

第13区

第12区の東側に平行する形で設定した幅5.0m、長さ11.5mの南北トレンチである。標高はT.P.181.0～184.0mを測る。この地点では表土の腐植土を外すと粘質土の地山（第1～4層）が露呈し、耕土は認められない。遺構、遺物は検出されなかった。

第14区

「菖蒲谷」と「向山」との間に、南東から北西へ扇状に広がる谷地形の斜面西側に築かれた棚田に対して設定した、幅4.0m、長さ12.0mの南北トレンチである。標高はT.P.177.0～177.5mを測る。現耕土、旧耕土を除去すると地山が露呈する。北端では旧耕土の堆積が見られ、その下には棚田造成以前の古い流土が堆積している。遺構、遺物は検出されなかった。



第9図 第12~18区土層図 (1/80)

第15・16区（第12図40～44）

第14区の東側に里道を挟んで設定した幅11.5m、長さ13.5mの南北方向のトレンチ（第15区）と幅3.0m、長さ17.0mの東西方向のトレンチ（第16区）である。標高はT.P.177.6～177.0mを測る。現耕土以下には旧耕土の堆積がみられるが、東側第16区では先の調査区で述べた谷地の東側の地山が隆起し、「向山」の尾根の連続が認められる。しかし西側第15区内は谷底となり、旧耕土下に山手からの流土（第8～17層）が厚く堆積している。地山には検出面で1.0m以上の転石が混在している。遺構は認められなかった。遺物は、西側谷地埋土（第7～9層）より土師器、須恵器、瓦器、土師質土器、磁器が少量出土した。7世紀後半～8世紀代の土師器甕（43）、11世紀後半、あるいは14世紀代の土師質小皿（40～42）、13～14世紀の陶器（44）がある。

第17区

第15・16区の山手側1段上の棚田に設けた8.0×9.0mの谷地形を横断するトレンチである。標高はT.P.178.0～179.5mを測る。地山が東に落ち込み調査範囲内ではその底面は確認できなかった。現耕土を除去すると、表土そして旧耕土があり、それらをさらに除去すると山手からの流土が谷底に堆積していった土の堆積（第6～13層）が認められる。地山は出水があり、軟弱である。遺構は検出されなかった。遺物は第1～5層より瓦器、磁器、サヌカイトが少量出土した。

第18区（第12図45）

第17区のさらに1段上の棚田に設けた一辺10.0mの方形の谷地形を横断するトレンチである。標高はT.P.180.8～182.1mを測る。堆積状況は先のトレンチでの結果と同様であり、現耕土除去後の旧耕土下には流土の堆積（第3～8層）がみられる。地山は出水があり、軟弱である。遺構は検出されなかった。遺物は、第1～2層より瓦器、土師質・瓦質土器、サヌカイトが少量出土した。11世紀の土師質小皿（45）が図化できた。

第19区

「菖蒲谷」と「向山」の間の谷地形の山手の最も高い地点に設定した幅7.0m、長さ18.0mの南東～北西方向のトレンチである。標高はT.P.183.5～185.6mを測る。現耕土を除去すると地山上に流れ込んだ流土の堆積がほとんどで、旧耕土は薄く、長い期間にわたって耕地利用された形跡は認められない。出水が激しく、軟弱な地山である。遺構は検出されなかった。流土中より須恵器、瓦器が少量出土した。

第20区

「向山」の尾根の先端に設けた幅3.0m、長さ7.0mのトレンチである。標高はT.P.186.90mを測る。表土を除去すると砂質土の地山となる。その下では山手が砂となる。遺構、遺物は出土しな



第10図 第19~25区土層図 (1/80)

かった。

第21区

第1区の北側の1段高い棚田に設けた一辺5.0mの方形のトレンチである。標高はT.P.165.8mを測る。現耕土を除去すると地山が露呈する。地山上面が床土化している。遺構、遺物は出土しなかった。

第22区

「菖蒲谷」と「向山」との間の谷地の裾に設けた幅2.0m、長さ4.0mのトレンチである。標高はT.P.166.5mを測る。表土下には旧耕土の堆積があり、その下の谷底に流れ込んだ流土（西壁断面第4～7層）がみられる。地山には検出面で1.0mを測る転石が認められる。出水が激しく、軟弱な地山である。遺構は検出されなかった。旧耕土より瓦質土器が少量出土した。

第23区

第14区の北側、T.P.168.1～170.5mの標高の棚田に設けた幅5.0m、長さ17.0mの南東～北西方向のトレンチである。本調査区では棚田が4枚かかっている。現耕土を除去すると地山の斜面に堆積した流土（第10層以下）が認められ、その堆積後に4段の棚田を造成した状況が観察される。地山には0.6mから1.0m以上の転石が含まれている。北壁断面には2.5m以上の岩の一部がかかっている。遺構は検出されなかった。旧耕土中より土師器、須恵器が少量出土した。

第24区

第15区の北側の1段低い棚田に設定した幅3.0m、長さ10.0mのトレンチである。標高はT.P.169.5～170.5mを測る。2枚の棚田がかかる。表土を除去すると旧耕土となり、南側の高い棚田では地山面に棚田造成の古い耕土の堆積が見られる。北側の低い棚では地山面が急激に落ち込み、その深みには流土の堆積層（第10～16層）が形成され、その上に棚田が造成されている。旧耕土（第2層）より瓦質羽釜が出土した。遺構は検出されなかった。

第25区

「向山」の尾根先端と平石谷の左岸の接するT.P.172.8 mの地盤に南北方向に設定した幅3.5m、長さ20.5mのトレンチである。表土または現耕土を除去すると不均質な土の堆積する地山となる。その主体は0.5～1.0mの石を含む砂質土や砂である。遺構は検出されなかった。床土よりサヌカイトが出土した。

第2節 右岸の調査区

右岸は、西から東へ標高244.5mの山頂に平石城跡が位置する「城ヶ塚」、標高249.8mの「安川山」、「笠松原山」、標高258.8mの「宮山」、そして高貴寺の寺域となる「岩山」を含む標高240.4～287.7mの山塊が葛城山西麓に取り付く地形となっている。それらの山塊の南裾を東西に街道が通り、それに沿って平石地区の集落が発達している。右岸の調査区はこの街道より平石谷に下る斜面一帯に造成された棚田に対して設けた。地籍にみられる小字名は左岸のそれとは違い、北の山手から南に延びる良好な尾根地形を中心に高貴寺の旧寺域に関連する字名の点在が注意される。

第26区（第12図46）

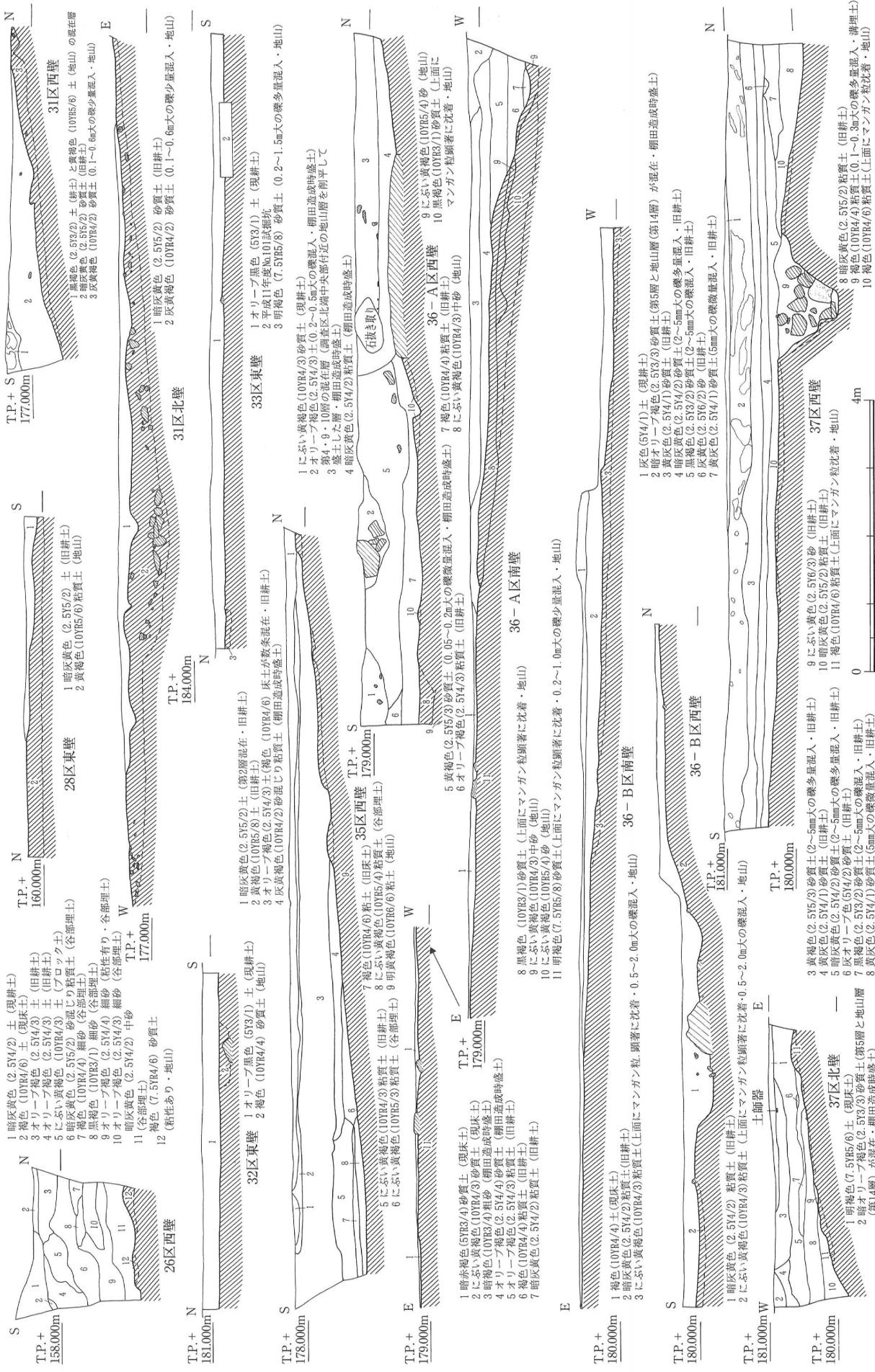
グリーンロード沿いの棚田に設置した幅2.0m、長さ32.0mの東西トレンチである。標高はT.P.157.9～158.5mを測る。「ハンジ山」から平石川に延びる尾根は平石集落を東西に貫く道路によって断ち切られているが、その道路下に築かれた狭い棚田に対して設定した。表土の下は旧耕土となり、その下には「ハンジ山」の急斜面に被る流土が溜り、その下が地山となる。「ハンジ山」の東に残る小字「井戸ノ尻」の南で、平石川に下る谷地形にかかるトレンチ東端部では地山はさらに低くなるようであるが、危険なため地山面まで達することはできなかった。遺構は検出されなかった。旧耕土中より土師器、須恵器、瓦器、瓦質土器が出土した。11世紀前半の土師質小皿（46）がある。

第27区

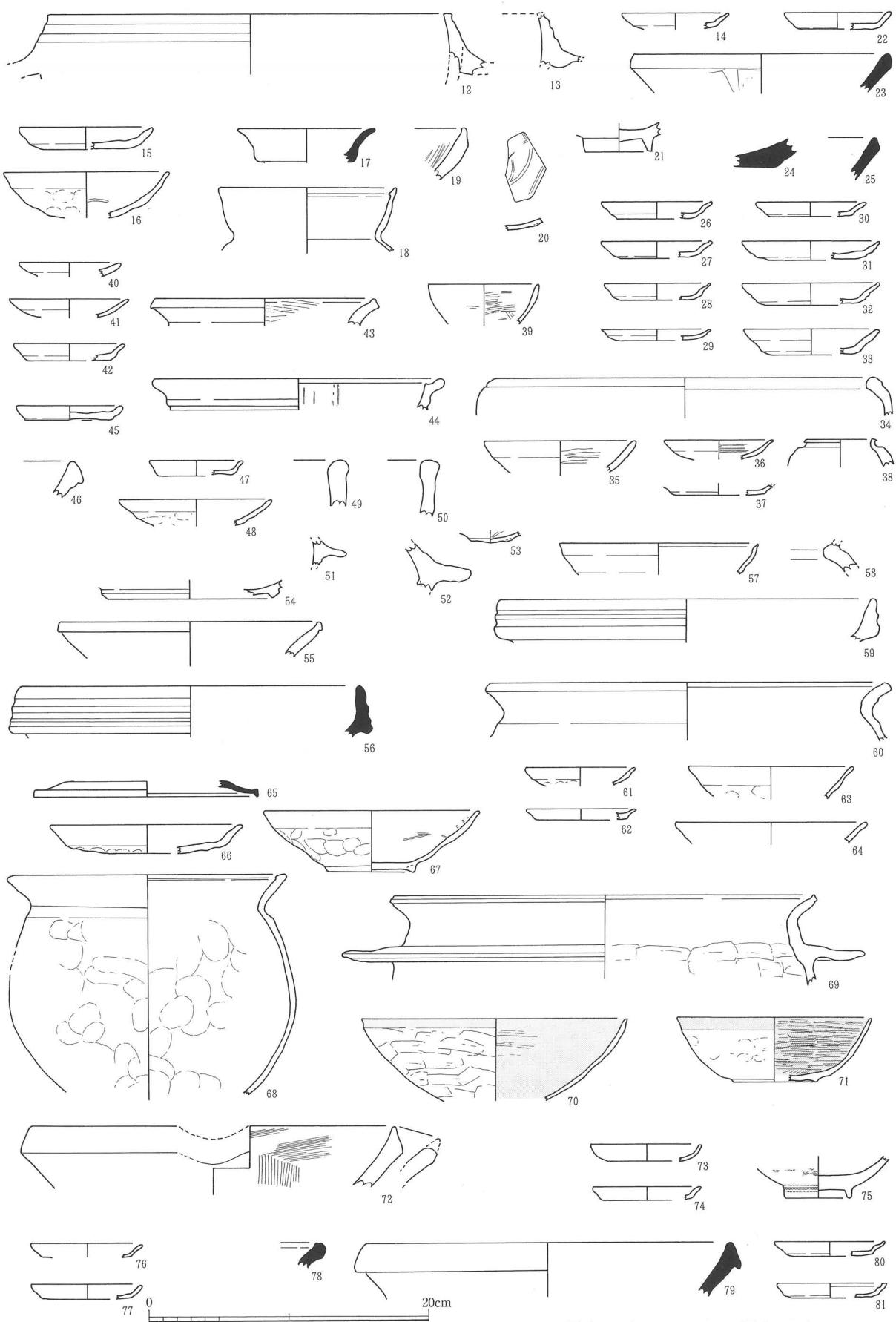
第26区の東側に設けた幅3.0m、長さ21.0mである。標高はT.P.159.0mを測る。トレンチの位置は「井戸ノ尻」南下の谷地形の中にあたる。現耕土を外すとその下には現耕土のための山土盛土（第1層）があり、その下はすべて谷筋に溜まった流土（第2～4層）である。この位置は谷地の斜面であり出水が激しいので流土下の地山に達することはできなかった。遺構は検出されなかった。旧耕土中より土師器、磁器、近代瓦が出土した。

第28区（第12図47～53、第21図149）

第27区の東側の1段上の棚田に設けた幅5.0m、長さ32.0mのトレンチである。ここでも平石川に下る上記の谷地が広がり、トレンチ西側はその中におさまり、流土（第3～6層）の堆積が見られる。東端に近い部分では地山が隆起し、現耕土下は直ちに地山となる。遺構は検出されなかった。流土中より土師器、須恵器、瓦器、瓦質・土師質土器、磁器が少量出土した。中世の瓦器碗、土師質土器類（47～53）が図化できた。土器以外では石鎌が1点（149）出土した。



第11図 第26～37区土層図 (1/80)



1区 (12, 13)
3区 (14)
5区 (15, 16)

6区 (17~21)
8区 (22, 23)
9区 (24~38)

12区 (39)
15, 16区 (40~44)
18区 (45)

26区 (46)
28区 (47~53)
31区 (54~56)

35区 (57~59)
36-A区 (60, 62~64)
36-B区 (61)
37区 (65~72)

42区 (73, 74)
43区 (75)
44-B区 (76, 77)
45区 (78~81)

第12図 各調査区出土遺物実測図 (1 / 4)

第31区（第12図54～56）

平石地区老人集会所の南側一帯に広がる棚田に残る小字「大門」に設けられた幅5.0m、長さ12.5mの東西トレンチである。現地の標高はT.P.177.4mを測る。現耕土を除去すると部分的に中世耕土が残るが、ほとんどのところが0.1～0.5mの石を多く含む地山となる。遺構は検出されなかった。中世耕土中より土師器、サヌカイトが少量出土した。土師器、須恵器（54～56）が含まれる。

第32区

平石地区老人集会所南側一帯の棚田の東側では北西から平石川に1本の谷が流入している。この谷と平石川によって北西～南東に延びる小規模な段丘が形成されている。この段丘の中腹部に築かれた棚田に対して設けた幅2.0m、長さ5.0mのトレンチである。標高はT.P.181.0mを測る。現耕土下は直ちに0.3～0.4mの石を含む砂質土の地山である。遺構、遺物は検出されなかった。

第33区

第32区と同じ段丘上で、その東に設けた幅2.0m、長さ9.0mのトレンチである。標高はT.P.183.6mを測る。現耕土下は0.2～1.5mの大小の石が多く混じる砂質土である。この個所では1999年度に実施した試掘坑（No.101）跡を確認した。遺構は検出されなかった。現耕土中より土師器、須恵器が少量出土した。

第34区

第33区の東側の里道に接した地点に設けた幅5.0m、長さ11.0mの南北方向のトレンチである。標高はT.P.187.4mを測る。現耕土を除去すると0.2～1.5mの石を非常に多く含む砂質土となり、その上面がわずかに床土化している。遺構、遺物は検出されなかった。

第35区（第12図57～59）

平石老人集会所より西120m付近で道路より南側に張り出す丘陵があり、ここに「坊ノ尻」という小字が残っている。この地点に底辺の長さ42.0m、高さ9.0mの三角形のトレンチを設定した。標高はT.P.178.2mを測る。現耕土下には旧耕土の水平な堆積がみられ、一部にはその下に古い時期の棚田を造成した盛土（第4層）が認められた。地山は北から南へT.P.178.1～177.1mにわたって傾斜する。また南端ではこの地山面に流土の堆積も認められた。遺構は検出されなかった。遺物は、中世耕土（第3～5・7層）より土師器、須恵器、瓦器、土師質土器、陶磁器、サヌカイトなどが出土している。図化できたのは土師質小皿、甕、陶器（57～59）などである。

第36-A区（第12図60・62～64）

平石老人集会所南側一帯の棚田の南端で、平石川に隣接する位置に設定した幅10.0m、長さ16.5mの東西トレンチである。標高はT.P.179.1～179.2mを測る。現耕土を除去すると調査区の北東部を中心に0.2～1.5mの石を多く含む砂質土の地山が露呈する。しかし南西方向にこの地山が落ち込み、その地盤高はT.P.179.1～178.2mを測る。1枚の棚田を造成するためその低所に北東部の地山を削り取って、これを盛り、平坦面を得ている。低所には地山を削り取る際に遊離した0.5～1.0mの石も盛土とともに放り込んでいる。西壁断面には2.0×3.0m以上の岩の一部がかかっている。棚田造成土の下には古い耕土（第5～7層）が一部に認められ、その中には中世遺物を含むので、中世の造成にかかる棚田をさらに拡張していった様子が窺える。遺構は検出されなかった。遺物は、中世耕土から土師器、須恵器、瓦器が少量出土した。8世紀代の土師器甕（60）、11世紀前半の土師質小皿（62）、13世紀～14世紀の瓦器椀（63・64）がある。

第36-B区（第12図61）

第36-A区の北側の1段上の棚田に対して設定した幅10.0m、長さ20.0mの東西トレンチである。標高はT.P.180.2～180.6mを測る。現耕土、床土を取り除くと、古い耕土（第2層）が部分的に残る。これには若干の中世遺物が含まれる。その下は北から南へT.P.180.6～180.0mをもって傾斜する地山となる。地山には0.5～2.0mの石が多く含まれている。調査区南西部の傾斜面には北東の高所から大小の石が落とし込まれていた。棚田造成に際して妨げとなった石であろう。遺構は検出されなかった。遺物は、中世耕土より土師器、須恵器、土師質土器、サヌカイトが少量出土した。11世紀の土師質小皿（61）がある。

第37区（第12図65～72）

平石老人集会所の南側一帯の棚田が位置する、丘陵の西を限る谷地形傾斜面に設定した幅4.0m、長さ11.5mの南北トレンチである。標高はT.P.190.1mを測る。現耕土を外すと厚さ0.3～0.4mの棚田造成盛土がある。盛土には周辺で削り取られた地山と中世耕土とが土塊となって混在している（第2層）。この造成土の下に古い耕土の堆積（第4～12層）が認められた。中・近世遺物を混入する。トレンチ中央ではさらにその下で西に落ち込む溝状の掘り込みが認められた。東端はT.P.179.6m、断面にかかる西端はT.P.178.0mを測る。埋土は0.1～0.3mの石を含む粘質土（第13層）で一気に埋めている。東の第38・39区から丘陵の西斜面を掘り込んで排水の便に供していた溝がある。埋土には棚田造成時期よりはるかに遡る奈良～平安時代の土器類が石とともに投棄された状態で出土した。この時期の包含層は第38・39区で希薄ではあるが確認している。そこでもやはり棚田造成により古い土壤はかなり削平を被っていた。おそらくそのような開墾の時点で包含層や遺構が削り取られ、この溝の埋め立てとともに投棄されたのだろうか。第4～12層からは土師器、

須恵器、瓦器、磁器が少量出土した。また溝の埋土（第13層）からは8世紀後半～15世紀におよぶ土師器、須恵器、黒色土器、土師質・瓦質土器（65～72）が出土した。

第38～41区（第19図82～147・第21図148・150）

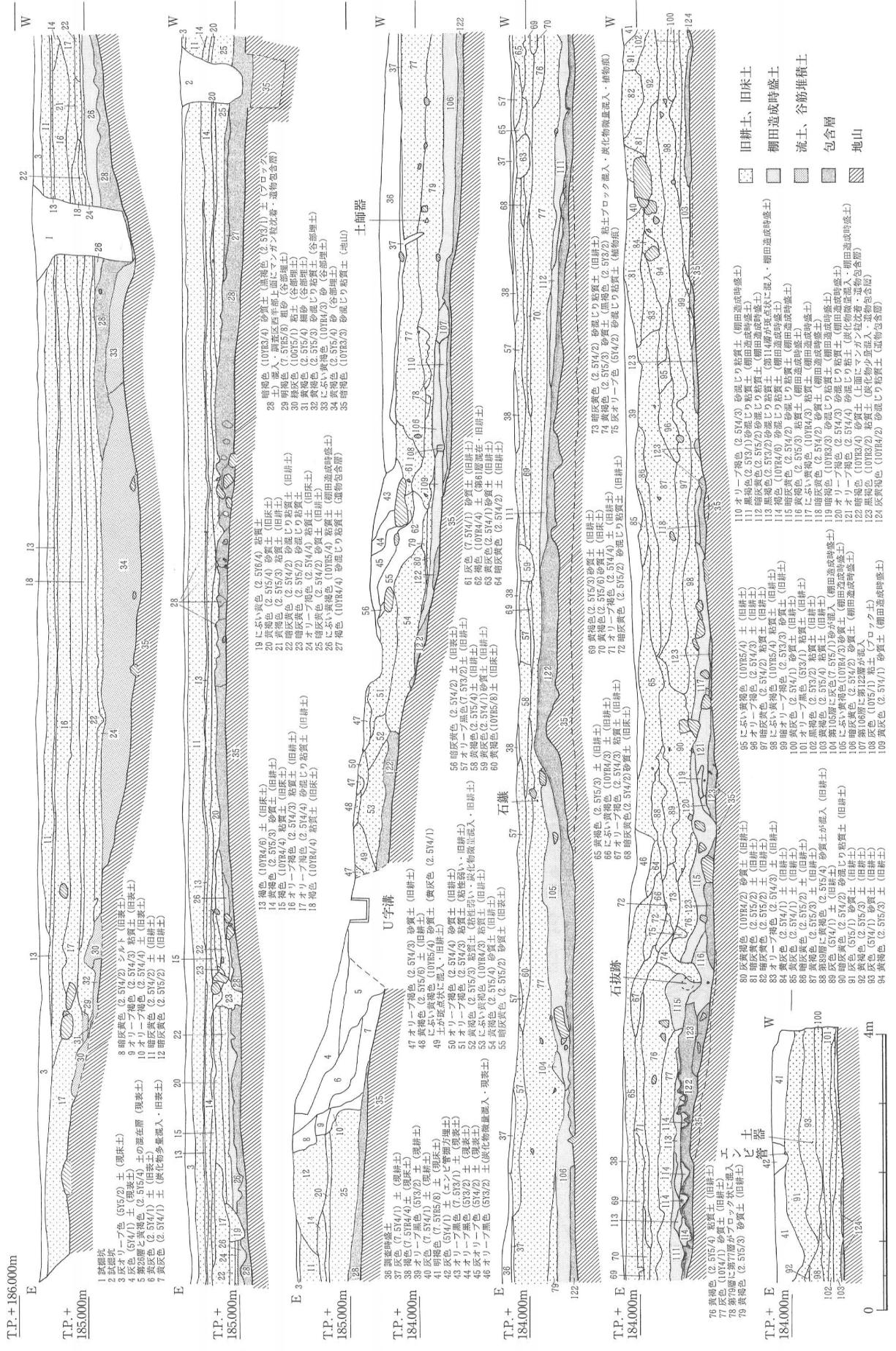
平石老人集会所の南側で南西に向かって広がる棚田の最上段に東西方向に設定した総面積912.0m²の調査区である。この地点には北から「前田」、「舍利」、「大門」といった小字名が残っている。南に緩やかに傾斜し、今回の調査対象区域全体からみても、この地点はこれより西100mに残る小字名「坊ノ尻」の小尾根とともに最もっとも安定した地形となっている。それゆえこの尾根周辺に早くから集落が発達したとみられる。調査区の中央寄りで北西から南東にかけて現用水路が横断する。この水路を挟んで東は1段上の棚田となり、その標高はT.P.185.0～185.7mを測る。水路より西は2～3段の南に傾斜する棚田となり、その標高はT.P.184.1～185.4mである。

1. 調査区の土層

調査区全体の堆積土の状態は、現耕土の下に中世～近世の耕土が数層にわたって重なり、その下には棚田造成当初の盛土、そしてその下が黄褐色の地山となるが、水路より西半のY=-31.270～31.295に挟まれた区域では中世、近世の耕土層と地山面との間に5～25cmの厚さの古代の遺物包含層が断続的に溜まっている。中世に入って活発になる棚田開発による削平を免れて、地山面の凹所にかろうじて残った包含層である。この区域を中心に地山面でピット、土坑、溝などを検出した。水路より東半では地山面が西半に比べて高く、棚田造成の際の削平の影響を受けやすかったらしく、調査区南壁にわずかに包含層の残りが認められたのを除けば、ほとんど中世以来の耕土層であった。南壁断面図にみられるように、Y=-31.000にあたる調査区コーナーを中心として、東西約7～8mの区間では石を多く含んでいる。トーンで示した旧谷地形の範囲では、0.3～0.4mの転石を混じえる流土がここでは地山となる。地山層は水路より西半では粘質土優勢であるのに対して、東半では砂や石を含む傾向がある。調査区東端には平石川に流れ込む、北東～南西方向の谷があり、この谷が本調査区の位置する北東から南西方向にかけて平石川に張り出す丘陵の西を限っている。この付近で地山に砂、石が混在するのはその谷のかつての氾濫原に相当するためだろう。

2. 検出された遺構

遺構は古代、中世の耕土層を除去した地山面で検出した。ピット、土坑、溝がある。ピットは大小あるが、建物として成り立つものは少ない。特に包含層のない地山面に直接棚田造成がなされたような箇所では、おそらく石を取り除いた後にできた窪みのようなものもあったであろう。そのようなピット群とは違って、トーンで示した旧谷地形の東側の、溝5、6、77のラインより北側に集中するピット群は、発掘の手触りがあきらかに異なり、要するに人為的な「掘り込み」の痕跡と思われるものが多い。この付近が微高地をなしていること、その微高地の道路を挟んで北側には地元の古くからの家屋が寄り添って占地していること、さらに「堂ノ東」、「堂ノ前」、



第13図 第38~41区土層図 (1/80)



第14図 第38～40区遺構全体図（1／200）

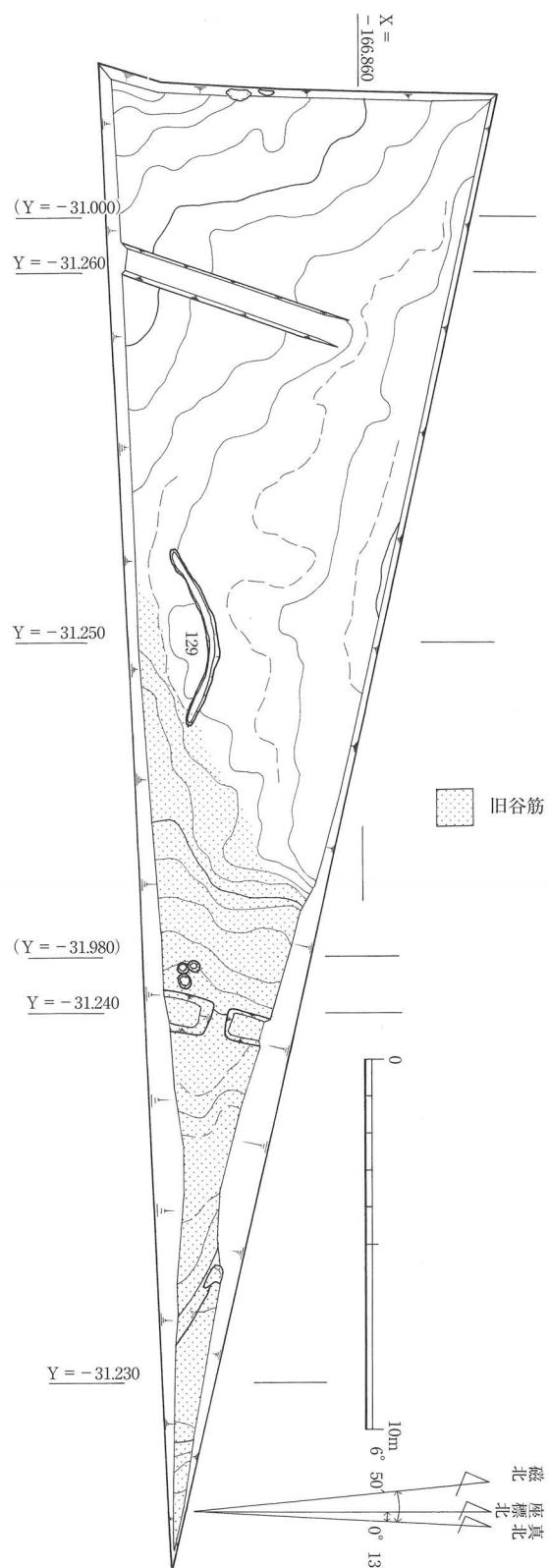
「堂ノ西」、「中垣内」など集落中心部を反映する小字がこの付近に散見されることを考慮すると、検出されたピット群は本来なんらかの建物を構成していたのかも知れない。

掘立柱建物

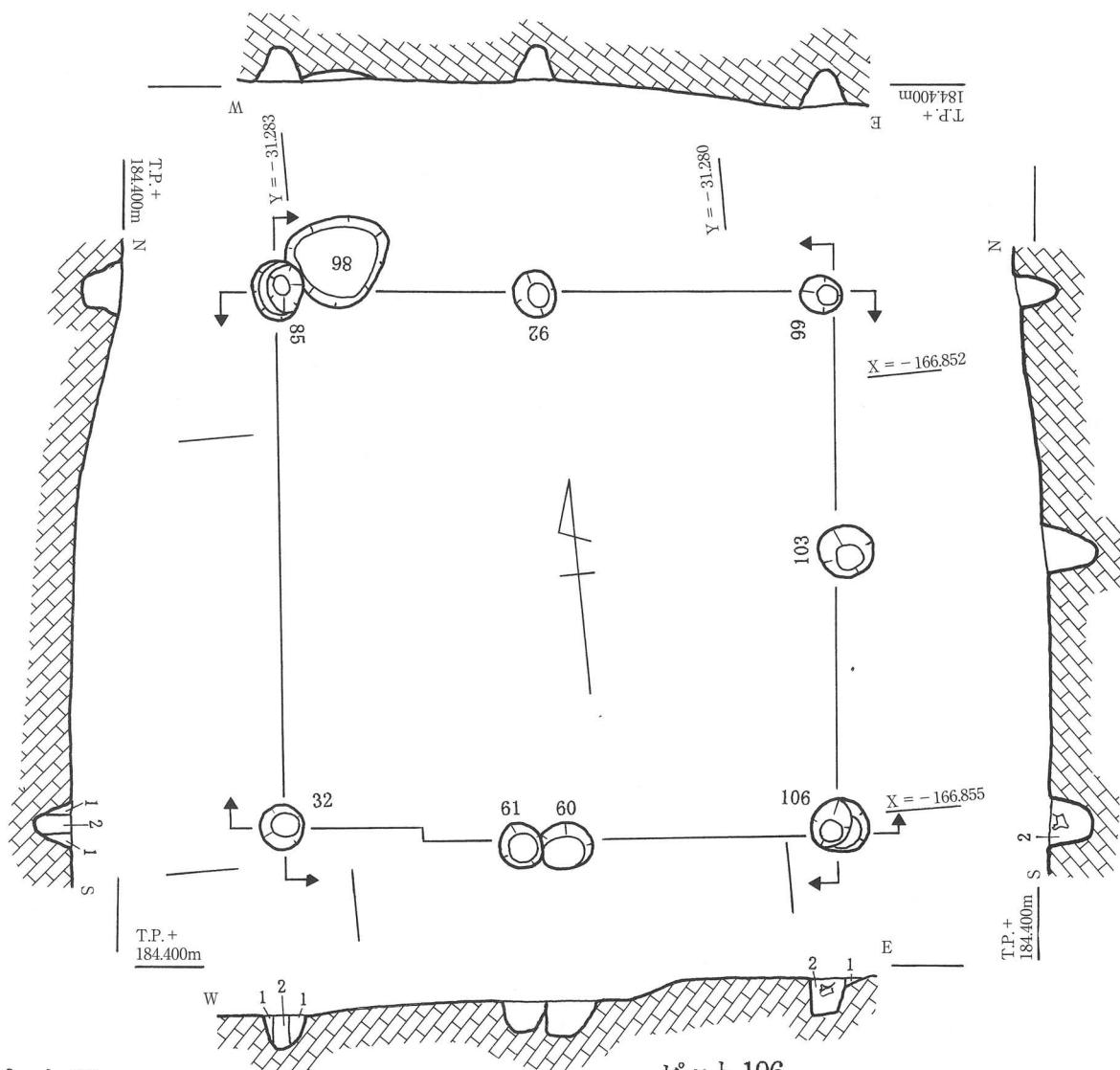
少なくともピット85、92、99、103、106、60、32によって構成される2間四方の建物として捉える。周辺のピットのうち100、101、105、113、109など東側に掘り込まれたピットも含めると東西にさらに1間ほど延びる可能性もある。いずれにせよ棚田造成による削平の影響を考えると本来の建物の一部分を捉えているにすぎないかもしれない。南北の軸方向はN-6°-E。現在の棚田の方向とは異なり、方位を意識している。棚田造成の盛土の除去後に検出したので、棚田開発にかかる以前の遺構である。柱間寸法は1.7~1.8m、約6尺。南西隅柱にあたるピット32では柱痕が認められた。柱痕の埋土には炭を含んでいる。ピット内からの出土遺物ではピット32で炭、ピット60で土師器片、ピット82で炭、土師器片、ピット85で炭、土師器片、ピット109で土師器片、サヌカイト片が出土したが、図化に耐える破片はない。

その他、建物周辺で検出されたピットのうち時期の判定可能な土器を出土したのは以下のピットである。ピット10では8世紀中頃~後半の土師器坏(103)、ピット24では13世紀の土師質小皿(105)、ピット39では9世紀末~10世紀初の土師器坏(99)、ピット58では10世紀の黒色土器椀(132)、ピット112では9世紀の緑釉陶器小碗(146)が出土している。これらのピットも何らかの施設に伴うものであったろう。

以上のほかに、土層のところで述べた検出面(地山面)にトーンで示した凹所に集中するピットがある。しかし埋土は上記の東側の建物付近のそれとは違っている。凹所の地山では大小の多くの石を含み、凹凸が顕著であるので、われわ



第15図 第41区遺構全体図 (1/200)



ピット 32

1 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 砂混じり粘質土
2 灰色 (5Y5/1) 砂質土 (炭混入)

ピット 85

にぶい黄褐色 (10YR4/3) 粘質土
(炭化物微量混入)

ピット 86

暗褐色 (10YR3/4) 粘質土

ピット 92

暗灰黄色 (2.5Y5/2) 粘質土

ピット 99

暗灰黄色 (2.5Y5/2) 砂混じり粘質土

ピット 103

暗褐色 (10YR3/4) 砂質土

ピット 60

暗灰黄色 (2.5Y5/2)
砂混じり粘質土

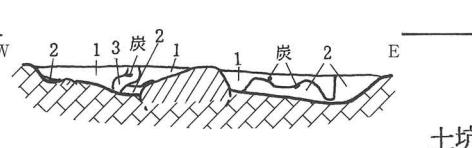
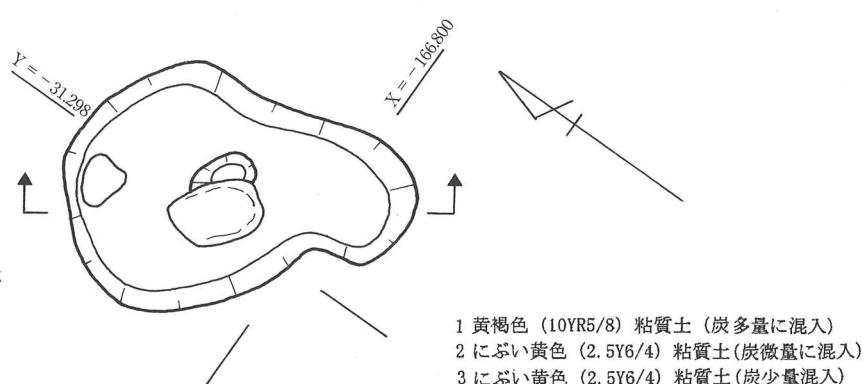
ピット 61

にぶい黄褐色 (10YR4/3) 粘質土

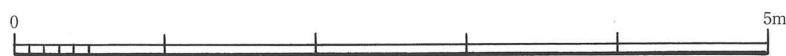
ピット 106

1 暗灰黄色 (2.5Y5/2) 粘質土
2 灰オリーブ色 (5Y5/2) 粘質土
(褐色 (10YR4/4) 粘質土 (地山) ブロック混入)

掘立柱建物



土坑 9



第16図 第38~40区建物・土坑 9 平面・断面図 (1 / 50)

れが遺構として検出した中にもそのような自然の営為による穴が含まれている可能性は高い。谷地形の埋没過程で繰り返し転石が混入していったため、棚田造成にあたってそれらの邪魔になる石は取り除かれたにちがいない。そのこともまた穴を生じる結果となったのであろう。

土坑

土坑には棚田造成に伴う土坑や造成後に掘り込まれた土坑がある。

土坑 9

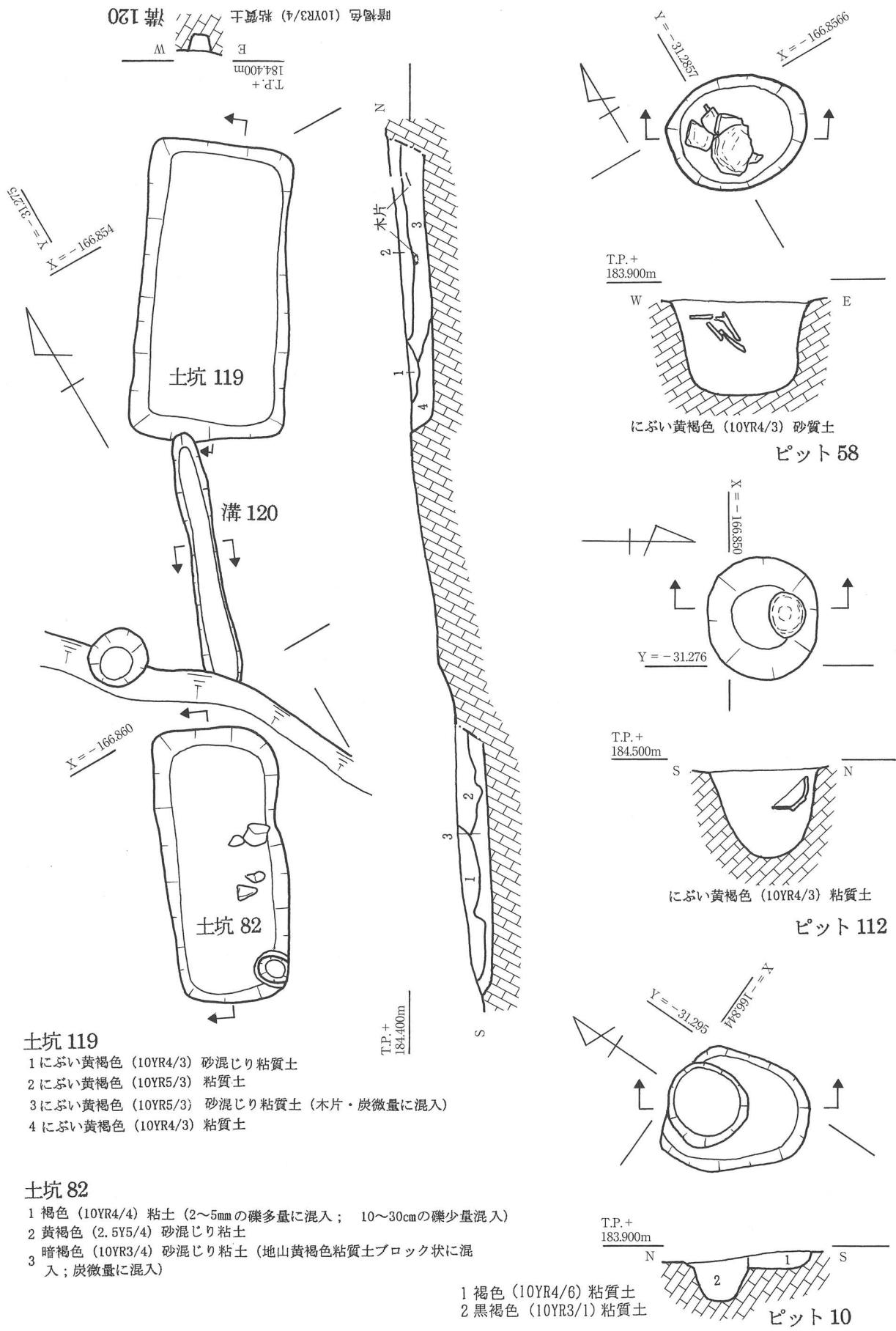
溝5、6より北東側の棚田に対し、それより1段低い棚田の位置に掘り込まれている。形状は不定形で、埋土は炭、灰が溜まって粘土のようになった土である。炭には丸太木の焼け残りが含まれている。櫻の樹幹と思われる。坑底中央には0.4×0.6m大の石が残っていた。石は自然石の表面が四方から打ち欠かれ、被火して淡く赤色に変じている部分がある。

新たに耕地を開墾するにあたって当地のような石の多いところではそれが妨げとなるので必ず取り除く必要がある。どのように取り除くかはこれまでの調査や地元での話でいくつかやり方があったことが分かっている。この遺構はその作業によって結果的に土坑となったもので、土坑がまず掘られたわけではない。人の手に余る大石の場合他所に移すのではなく、このように石を叩いて小さくして将来の耕土より下にくるようにする。そのため石の周囲で火を焚き、表面を熱しておいてそれから冷水をかける。すると石は急激に冷やされて亀裂が生じる。それを叩く、というより剥ぎ取る。旧石器時代以来応用された簡単で効率的なやり方である。地元の年輩者から平石ではこのようなしんどい作業を嫌になるほどやって、今ある棚田を作ったと言う話を伺った。その作業がこの遺構の存在によって少なくとも中世の棚田開発の時点でも行われていたことになる。

土坑82・119・128

上記の掘立柱建物とその周辺のピット群が集中する区域の東側に、北東～南西方向に長軸を揃え、掘り込まれた長方形の土坑。長軸は建物の方向とは異なり、緩傾斜面の等高線に大体直交する。深さは土坑119が0.2～0.25m (T.P.184.18～184.28m)、土坑82が0.3m (T.P.183.70～183.74m)、土坑128が0.05m (T.P.183.33～184.42m)、底面の高低差はそれぞれ10cm以内である。坑壁面は直で、底面はほぼ平坦である。埋土についてみると残りの浅い土坑128を別とすれば、土坑82では第1層に炭がわずかに混入し、第3層には地山の粘土ブロックが含まれ、土坑119では第3層に木片と炭がやはり混じる。なんらかの目的で地山を掘り込んで、目的が達せられると傍らに置いておいた掘り上げた土でまた埋め戻したような感じである。土坑82、119からは土師器片が出土したが、時期の判定には耐えない小片である。

形状や方向、埋土の特徴から同じ意図で掘り込まれたことは明らかであるが、それ以上のことは分からない。ただどの土坑も北辺が上下の棚田の段下のラインに沿っているから、棚田造成以後の掘り込みである。このように耕作する面に掘り込むというのは田として用いられる時にそんな無意味なことをしないだろうから、おそらく米作りをしていない時期になんらかの目的で一時

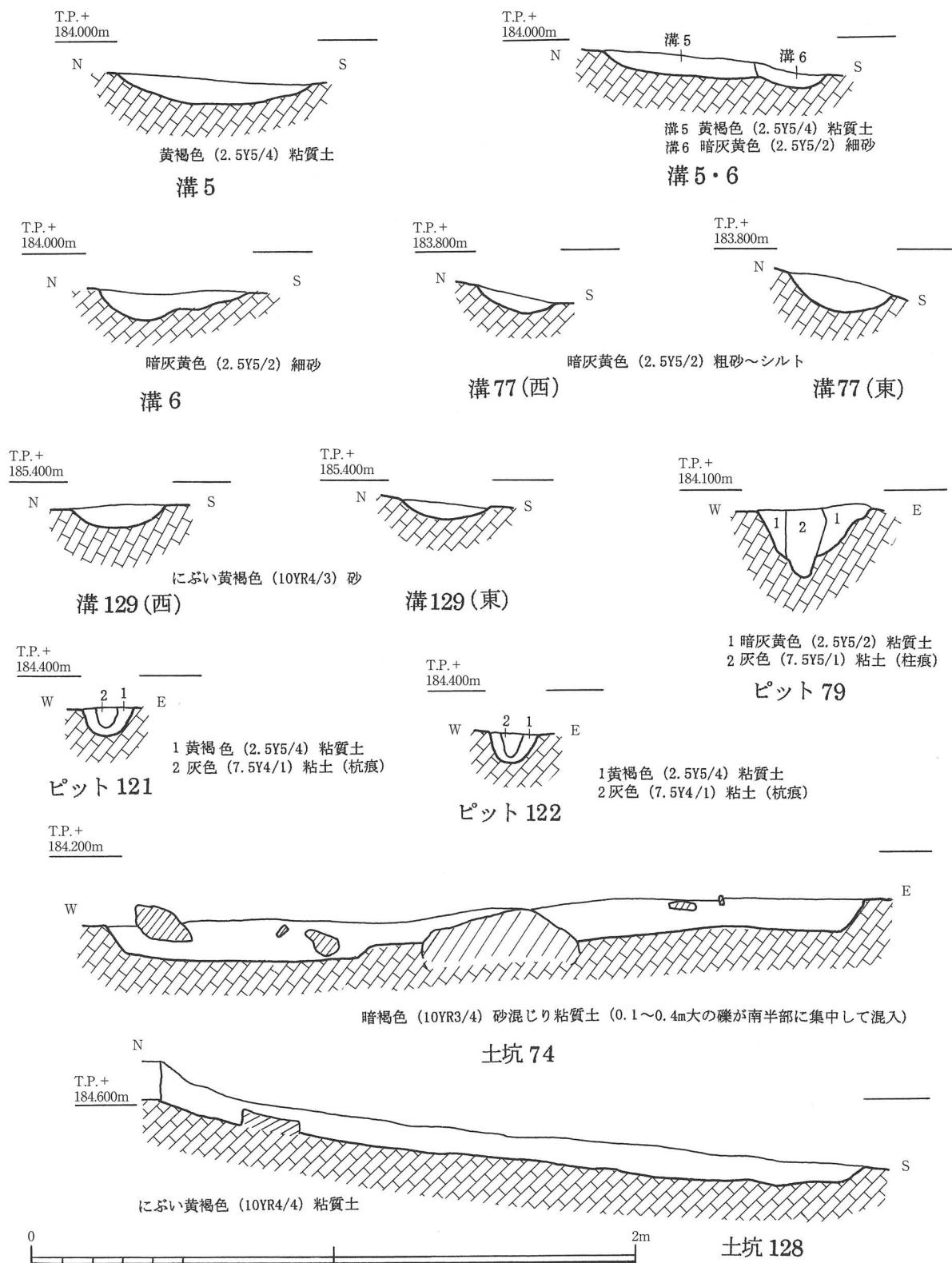


第17図 第38~40区土坑・ピット平面・断面図 (1/10, 1/50)

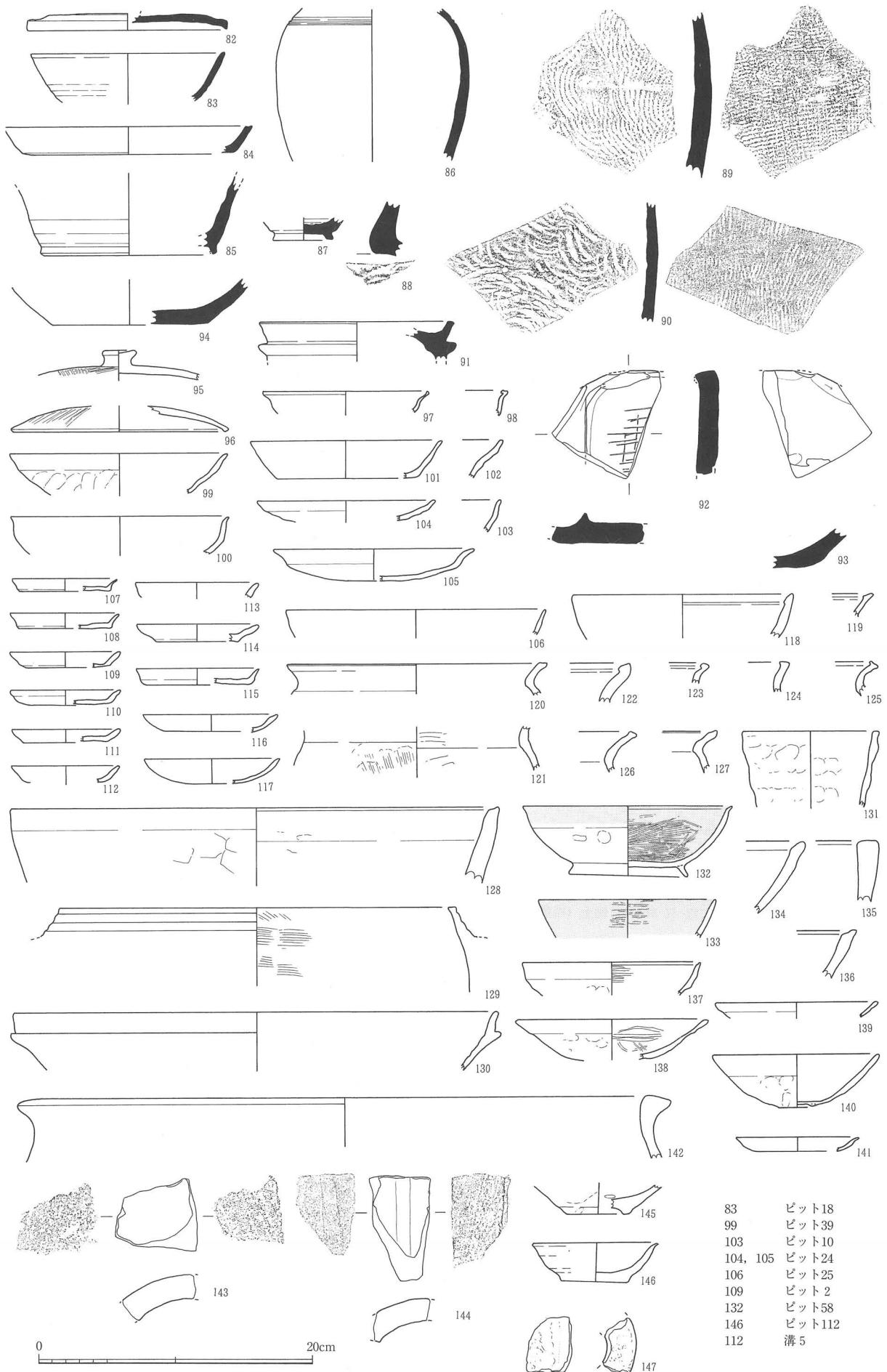
的に掘って埋め戻したものと考えられる。

溝

溝には棚田に伴うもの（溝5・6・77）や自然の営為によるもの（溝4、29、129）がある。



第18図 第38~40区溝・ピット・土坑断面図 (1 / 20)



第19図 第38~41区出土遺物実測図 (1/40)

第2表 第38~41区検出遺構一覧表

遺構番号	種類	形状	規 模 (cm)		土 色・土 質	出 土 遺 物 () 内は図化番号	
			辺または径	深さ			
1	ピット	不整形	南北 東西	40.0 22.0	10.0	暗褐色 (10YR3/4) 粘質土 (炭化物少量混入)	
2	ピット	円形	径	30.0	8.0	暗褐色 (10YR3/4) 砂混じり粘質土	土師器小皿 (109)
4	溝		長さ 幅 方向	190.0 24.0 N-0~15 ° -E	8.0	暗褐色 (10YR3/4) 砂質土	土師器
5	溝		長さ 幅 方向	610.0 55.0-96.0 N-20~40 ° -E	5.0	黄褐色 (2.5Y5/4) 粘質土	土師質皿・瓦器 (112)
6	溝		長さ 幅 方向	1215.0 30.0 N-20~40 ° -W	4.0	暗灰黃色 (2.5Y5/2) 細砂	
7	ピット	不整形	南北 東西	50.0 57.0	23.0	暗灰黃色 (2.5Y5/2) 粘質土 (褐色 (10YR4/4) 土混入・石抜き取り痕)	土師器・須恵器・土師質皿
8	ピット	円形	南北 東西	22.0 26.0	11.0	暗褐色 (10YR3/4) 砂混じり粘質土	
9	土坑	不整形	南北 東西	55.0 230.0	30.0	〔第1層〕 黄褐色 (10YR5/8) 粘質土 (炭多量に混入) 〔第2層〕 にぶい黄色 (2.5Y6/4) 粘質土 (炭微量に混入) 〔第3層〕 にぶい黄色 (2.5Y6/4) 粘質土 (炭少量混入)	
10	ピット	不整形	南北 東西	46.0 55.0	6.0	褐色 (10YR4/6) 粘質土	土師器・須恵器 (103)
12	ピット	円形	径	24.0	14.0	暗灰黃色 (2.5Y5/2) 砂混じり粘質土	土師器
18	ピット	円形	南北 東西	50.0 55.0	24.0	暗褐色 (10YR3/4) 粘質土	須恵器・サヌカイト (83)
19	ピット	円形	径	20.0	14.0	暗褐色 (10YR3/4) 粘質土	土師器・瓦器
20	ピット	円形	径	21.0	16.0	暗褐色 (10YR3/4) 粘質土	
21	ピット	円形	径	32.0	26.0	暗褐色 (10YR3/4) 粘質土	
22	ピット	円形	径	40.0	24.0	暗褐色 (10YR3/4) 砂混じり粘質土	
23	ピット	円形	径	33.0	20.0	暗褐色 (10YR3/4) 砂質土	土師器
24	ピット	円形	径	33.0	17.0	暗褐色 (10YR3/4) 粘質土 (炭化物微量混入)	土師質皿 (104・105)
25	ピット	円形	径	26.0	29.0	暗褐色 (10YR3/4) 砂質土	土師器・黒色土器・土師質皿 (106)
26	ピット	円形	径	64.0	18.0	暗灰黃色 (2.5Y5/2) 砂混じり粘質土	土師器
27	ピット	円形	径	26.0	11.0	暗褐色 (10YR3/4) 砂混じり粘質土	
28	ピット	円形	径	27.0	30.0	暗褐色 (10YR3/4) 砂混じり粘質土 (炭化物微量混入)	炭
29	溝		長さ 幅 方向	170.0 20.0 N-30-W~N-10 ° -E	5.0	暗灰黃色 (2.5Y5/2) 砂質土	
31	ピット	円形	径	30.0	12.0	暗灰黃色 (2.5Y5/2) 粘質土 (炭化物微量混入)	
32	ピット	円形	径	30.0	30.0	〔第1層〕 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 砂混じり粘質土, 〔第2層〕 灰色 (5Y5/1) 砂質土 (炭混入)	炭
34	ピット	円形	径			にぶい黄褐色 (10YR4/3) 砂質土	土師器
36	ピット	円形	径	21.0	21.0	にぶい黄褐色 (10YR4/3) 砂質土	
37	ピット	楕円形	南北 東西	48.0 55.0	10.0	にぶい黄褐色 (10YR4/3) 砂質土	
39	ピット	円形	径	35.0	8.0	にぶい黄褐色 (10YR4/3) 砂質土	土師器 (99)

40	ピット	円形	径	52.0	19.0	にぶい黄褐色 (10YR4/3) 砂質土	
54	ピット	不整形	南北 東西	50.0 64.0	18.0	にぶい黄褐色 (10YR4/3) 砂質土	
55	ピット	円形	径	19.0	7.0	にぶい黄褐色 (10YR4/3) 砂質土	
57	ピット	円形	径	18.0	6.0	にぶい黄褐色 (10YR4/3) 砂質土	
58	ピット	円形	径	25.0	19.0	にぶい黄褐色 (10YR4/3) 砂質土	黒色土器 (132)
59	ピット	不整形	南北 東西	50.0 48.0	11.0	にぶい黄褐色 (10YR4/3) 砂混じり粘質土	土師質土器・サヌカイト
60	ピット	円形	径	35.0	23.0	暗灰黄色 (2.5Y5/2) 砂混じり粘質土	土師器
61	ピット	円形	径	31.0	24.0	にぶい黄褐色 (10YR4/3) 粘質土	土師器
62	ピット	円形	径	21.0	22.0	暗灰黄色 (2.5Y5/2) 砂質土	
63	ピット	円形	径	20.0	5.0	暗灰黄色 (2.5Y5/2) 砂質土	
66	ピット	不整形	南北 東西	57.0 50.0	11.0	にぶい黄褐色 (10YR4/3) 砂混じり粘質土	
67	ピット	円形	径	28.0	9.0	にぶい黄褐色 (10YR4/3) 粘質土	
71	ピット	楕円形	南北 東西	46.0 60.0	30.0	褐色 (10YR4/6) 粘質土	
72	ピット	円形	径	50.0	30.0	褐色 (10YR4/6) 砂混じり粘質土	
73	ピット	楕円形	南北 東西	50.0 44.0	30.0	褐色 (10YR4/6) 粘質土 (5mm程の礫少量含む)	サヌカイト
74	土坑	不整形	南北 東西	140.0 260.0	13.0	暗褐色 (10YR3/4) 砂混じり粘質土 (0.1~0.4m大の礫が南半部に集中して混入)	
75	ピット	円形	径	16.0	12.0	暗灰黄色 (2.5Y5/2) 粘質土	土師器甕
76	ピット	円形	径	22.0	4.0	暗灰黄色 (2.5Y5/2) 砂礫	
77	溝		長さ 幅 方向	850.0 34.0 N-60~68 ° -W	12.0	暗灰黄色 (2.5Y5/2) 粗砂~シルト	土師器甕
78	ピット	円形	径	径27	16.0	暗灰黄色 (2.5Y5/2) 粘質土	
79	ピット	楕円形	南北 東西	25.0 40.0	22.0	[第1層] 暗灰黄色 (2.5Y5/2) 粘質土 [第2層] 灰色 (7.5Y5/1) 粘土 (柱痕)	
80	ピット	円形	幅	30.0	17.0	暗灰黄色 (2.5Y5/2) 粘質土	土師器
81	ピット	円形	幅	28.0	34.0	暗灰黄色 (2.5Y5/2) 粘質土	
82	土坑	方形	南北 東西 方向	247.0 110.0 N-23 ° -E	30.0	[第1層] 褐色 (10YR4/4) 粘土 (2~5mmの礫多量に混入； 10~30cmの礫少量混入； 炭微量に混入) [第2層] 黄褐色 (2.5Y5/4) 砂混じり粘土 [第3層] 暗褐色 (10YR3/4) 砂混じり粘土 (地山黄褐色粘質土ブロック状に混入)	土師器・炭
83	ピット	円形	径	25.0	11.0	暗褐色 (10YR3/4) 砂質土	
84	ピット	円形	径	39.0	15.0	にぶい黄褐色 (10YR4/3) 粘質土	
85	ピット	円形	径	37.0	31.0	にぶい黄褐色 (10YR4/3) 粘質土 (炭化物微量混入)	土師器
86	ピット	不整形	南北 東西	64.0 70.0	10.0	暗褐色 (10YR3/4) 粘質土	土師器
87	ピット	円形	径	23.0	8.0	暗灰黄色 (2.5Y5/2) 粘質土	土師器
88	ピット	円形	径	20.0	14.0	暗灰黄色 (2.5Y5/2) 粘質土	土師器・黒色土器
90	ピット	円形	径	18.0	20.0	暗灰黄色 (2.5Y5/2) 粘質土	石
91	ピット	円形	径	20.0	10.0	にぶい黄褐色 (10YR4/3) 粘質土	
92	ピット	円形	径	20.0	24.0	暗灰黄色 (2.5Y5/2) 粘質土	

93	ピット	円形	径	24.0	28.0	にぶい黄褐色 (10YR4/3) 砂混じり粘質土	土師器
94	ピット	円形	径	21.0	33.0	暗灰黄色 (2.5Y5/2) 粘質土	
95	ピット	円形	径	14.0	33.0	暗灰黄色 (2.5Y5/2) 砂混じり粘質土	
96	ピット	円形	径	18.0	12.0	暗灰黄色 (2.5Y5/2) 砂混じり粘質土	
97	ピット	円形	径	21.0	32.0	暗灰黄色 (2.5Y5/2) 砂混じり粘質土	
98	ピット	円形	径	20.0	34.0	暗灰黄色 (2.5Y5/2) 粘質土	
99	ピット	円形	径	27.0	14.0	暗灰黄色 (2.5Y5/2) 砂混じり粘質土	土師器・サヌカイト
100	ピット	円形	径	20.0	26.0	暗灰黄色 (2.5Y5/2) 砂混じり粘質土	土師質Ⅲ
101	ピット	円形	径	27.0	34.0	暗灰黄色 (2.5Y5/2) 砂混じり粘質土	
102	ピット	円形	径	17.0	41.0	暗灰黄色 (2.5Y5/2) 砂混じり粘質土	
103	ピット	円形	径	35.0	40.0	暗褐色 (10YR3/4) 砂質土	
104	ピット	円形	径	16.0	13.0	にぶい黄褐色 (10YR4/3) 砂混じり粘質土	
105	ピット	円形	径	20.0	52.0	暗灰黄色 (2.5Y5/2) 砂質土	土師器碗・土師質Ⅲ
106	ピット	円形	南北 東西	30.0 38.0	26.0	[第1層] 暗灰黄色 (2.5Y5/2) 粘質土 [第2層] 灰オリーブ色 (2.5Y5/2) 粘質土 (褐色 (10YR4/1) 粘質土 (地山) プロック混入)	サヌカイト
107	ピット	円形	径	33.0	9.0	にぶい黄褐色 (10YR4/3) 粘質土	
108	ピット	円形	径	38.0	13.0	にぶい黄褐色 (10YR4/3) 粘質土	
109	ピット	円形	径	19.0	10.0	にぶい黄褐色 (10YR4/3) 粘質土	
110	ピット	円形	径	20.0	15.0	にぶい黄褐色 (10YR4/3) 粘質土	土師器
111	ピット	円形	径	25.0	12.0	にぶい黄褐色 (10YR4/3) 粘質土	
112	ピット	円形	径	23.0	16.0	にぶい黄褐色 (10YR4/3) 粘質土	陶器 (146)
113	ピット	円形	径	30.0	26.0	にぶい黄褐色 (10YR4/3) 粘質土 (炭化物微量混入)	土師器甕
115	ピット	円形	径	40.0	4.0	暗褐色 (10YR3/4) 粘質土	土師器
116	ピット	円形	径	25.0	14.0	にぶい黄褐色 (10YR4/3) 粘質土	
117	ピット	円形	径	50.0	70.0	にぶい黄褐色 (10YR4/3) 粘質土	
119	土坑	方形	南北 東西 方向	171.0 134.0 N-30° -E	34.0	[第1層] にぶい黄褐色 (10YR4/3) 砂混じり粘質土, [第2層] にぶい黄褐色 (10YR5/3) 粘質土 [第3層] にぶい黄褐色 (10YR5/3) 砂混じり粘質土 (木片・炭微量に混入) [第4層] にぶい黄褐色 (10YR4/3) 粘質土	土師器
120	溝		長さ 幅	206.0 30.0	15.0	暗褐色 (10YR3/4) 粘質土	土師器
121	ピット	円形	径	18.0	21.0	[第1層] 黄褐色 (2.5Y5/4) 粘質土 [第2層] 灰色 (7.5Y4/1) 粘土 (杭痕)	
122	ピット	円形	径	22.0	26.0	[第1層] 黄褐色 (2.5Y5/4) 粘質土 [第2層] 灰色 (7.5Y4/1) 粘土 (杭痕)	
125	ピット	楕円形	南北 東西	30.0 36.0	33.0	にぶい黄褐色 (10YR4/3) 砂混じり粘質土	
128	土坑	方形	南北 東西 方向	238.0 60.0以上 N-30° -E	15.0	にぶい黄褐色 (10YR4/4) 粘質土	
129	溝		長さ 幅	500.0 30.0	5.0	にぶい黄褐色 (10YR4/3) 砂	

溝5・6・77

北西から南東に延びる一連の溝跡である。これらの溝より北東側に1段高い棚田があるので、その棚田の南縁につけた配水溝であろう。各々の棚田には高きから低きへ流れるように、このような溝をつけ水回りの配慮がなされたと思われる。溝5では10世紀末～11世紀初と考えられる土師質小皿（112）が出土している。

溝4・29・129

旧谷地形の地山面で方向の定まらない水筋の痕跡が認められる。地山の凹凸によって生じたものである。

溝120

土坑119と土坑82の間に両者を繋ぐような形で掘り込まれている。土質は土坑のそれと似ている。しかし土坑との関連はよく分からぬ。土師器片が出土している。

第42区（第12図73・74）

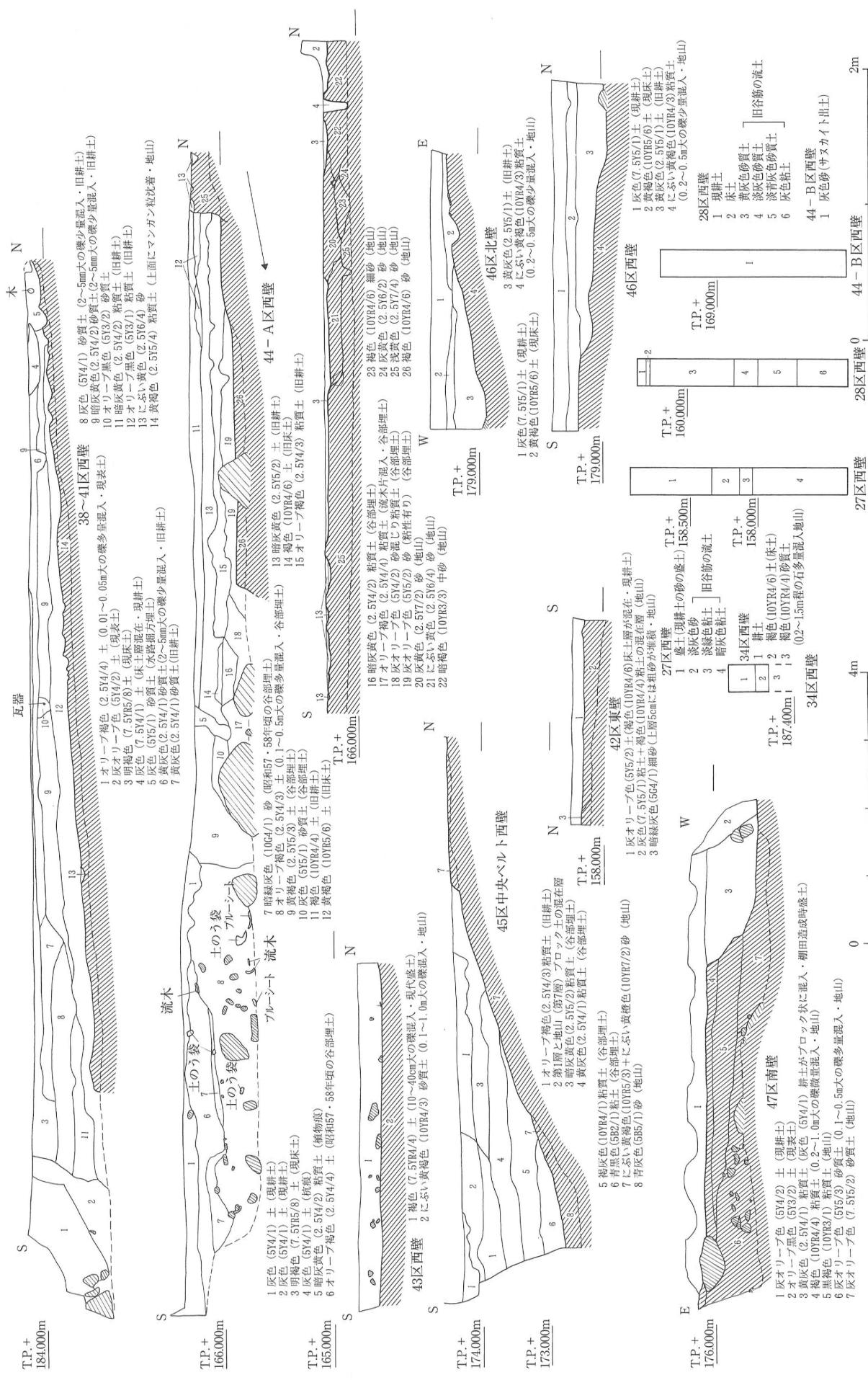
第28区東に設けた3.0×4.0m四方のトレンチである。標高はT.P.158.4mを測る。現耕土下は地山の粘土、砂である。平石川右岸の冠水帯を示す堆積である。遺構は検出されなかつたが、出土遺物には土師器小皿が出土している（73、74）。

第43区（第12図75）

平石川が大きく北に張り出す蛇行部の右岸に設定した幅5.0m、長さ8.0mのトレンチである。標高はT.P.164.6mを測る。現耕土を取り除くと、0.1～1.0mの石を多く含む砂質土が露呈する。この土にはブルーシートの破片が含まれていた。地元の話では昭和57年（1982）8月2日の台風10号による大雨のため平石川が氾濫し、同地点一帯が冠水したため町当局により応急の措置が取られたので、この付近の地味は悪いとのことである。『続河南町誌』に同月1日より災害対策本部を設置し実施された「河川堤防決壊を防ぐための資材・土のう・杭・栗石などの配分、消防団の出動」とある応急措置（河南町2004；434～437頁）の一環であろう。本調査区はまさにその個所にあたっていたようである。現耕土より磁器碗（75）が出土した。

第44-A区

第43区の東側の1段上の棚田に対して設定した。総面積は537.0m²である。標高はT.P.166.5mを測る。現耕土を除くと北半部の一部に旧耕土が認められるが、その他は0.1～0.5mの石を多量に含む流土である。砂の地山がその下に認められるが北端部に限られ、南へは平石川に向かって大きく落ち込んでいる。流土には流木も含まれ、また流土中第2層からはコカコーラの缶が出土した。第43区と同様水害の痕跡とその後の応急措置に伴う一連の堆積土と思われる。遺構・遺物は検出されなかつた。



第44-B区（第76・77）

第44-A区の北側の1段上の棚田に設けた幅5.0m、長さ23.0mのトレンチである。標高はT.P.169.4～170.3mを測る。現耕土下は灰色砂である。先の調査区と同様平石川の右岸の冠水帯に含まれる。遺構は検出されなかった。西壁際で1.4m程度掘り下げたが、なお灰色砂であった。遺物は、現耕土より土師器、磁器、サヌカイトが少量出土している。土師質小皿（76・77）は11世紀後半と考えられる。

第45区（第12図78～81）

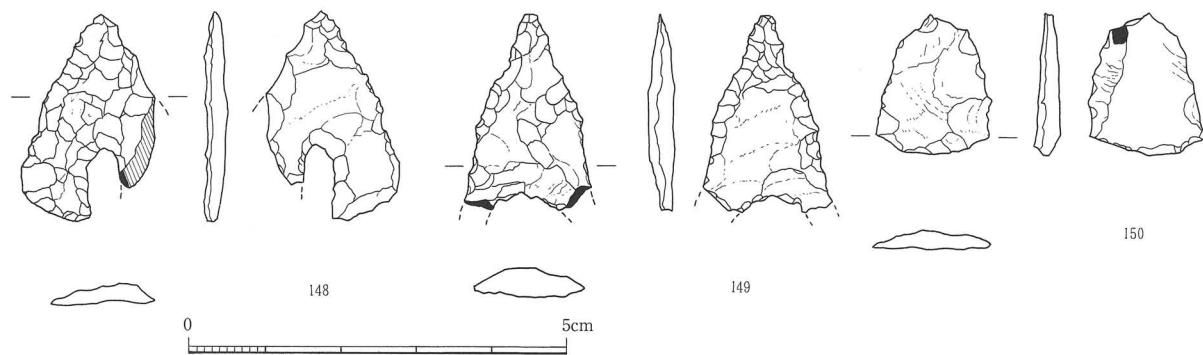
第44-B区の北東の2段高い棚田上に設定した面積315.0m²の調査区である。この棚田は北東～南西への谷地形を埋めて6～7段の田としたうちの1枚である。現耕土面でも出水が激しく、地盤は軟弱である。トレンチ中央に南北に設定した断面観察坑では現耕土を除去すると旧耕土の堆積が認められる。旧耕土の一部には地山のブロックが混入し、棚田造成が繰り返されたようである。その下にはT.P.174.5～172.9mと南へ傾斜する地山面上に何回か水平に盛り上げた一連の棚田造成土（第3～6層）が観察される。地山は青灰色の砂であるので、これも谷地に流れ込んだ堆砂のひとつであろう。棚田造成土より土師器、須恵器、瓦器、土師質土器、磁器、近世～近代の瓦が出土した。須恵器、土師質小皿（78～81）が図化できた。

第46区

第37区南に設定した4.5×5.0 mのトレンチである。標高はT.P.179.6mを測る。現耕土下には古い耕土が西半部に堆積し、東半部は地山となる。地山は東端でT.P.179.4m、西端でT.P.177.9m、また南端ではT.P.179.3m、北端ではT.P.179.9mと西北へ傾斜する。地山面には0.1～0.2mの石に混じって0.7mの石が露呈している。遺構は検出されなかった。古い耕土より土師器、須恵器が少量出土した。

第47区

第36-A・B区の西側の斜面下の棚田に設けた幅7.0m、長さ8.0mの北東～南西方向のトレンチである。現耕土下は北から平石川に流れ込む谷地形に古くから繰り返し堆積した石を多く含む粘質土、そしてその下は0.1～0.5mの石をこれも多く含む砂質土である。遺構、遺物は検出されなかった。



第21図 出土石器実測図（1／1）

第3表 出土石器法量

挿図番号	遺物番号	器種	出土個所	層位ほか	法 量				材質	備 考
					長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)		
第21図	148	凹基式石鎌	40区	中世耕土（第13図南壁断面図出土位置図示）	25.72	16.56	3.99	1.50	サヌカイト	剥片素材。両脚の端部欠く。
	149	凹基式石鎌	28区	旧谷筋流土（3～6層）	26.38	17.99	3.15	1.10	サヌカイト	剥片素材。円脚の抉り深い。脚部の一端欠く。
	150	円基式石鎌	39区 (X=-166850, Y=-31290)	中世棚田造成以前 遺物包含層	18.39	15.13	2.50	0.80	サヌカイト	剥片素材。

第3章　まとめ

今回の平石遺跡の調査によって得た主要な結果は以下の通りである。

左岸の第2区で、5世紀前半の須恵器甕が棚田造成以前に山手から流れ下った土砂の堆積層から、他に共伴する遺物もなく単独で出土した。この地点は南東の「菖蒲谷」と「向山」という2つの小字名を残す山に挟まれた谷地形が北西に延びて平石谷に流れ込む付近にあたり、出土層はその流跡の西の河岸段丘斜面の堆積層である。土器の残り具合は良好で、山手より土砂に紛れて転落してきたとは思えず、調査区に近いところで一気に埋没した状態である。南の同じ山手の斜面に設けた第6区では旧耕土からの出土ではあるが布留式甕の破片が見つかっている。当地ではこれまで5世紀代の明確なデータは得られていなかったので、いずれもそれを補う好資料である。

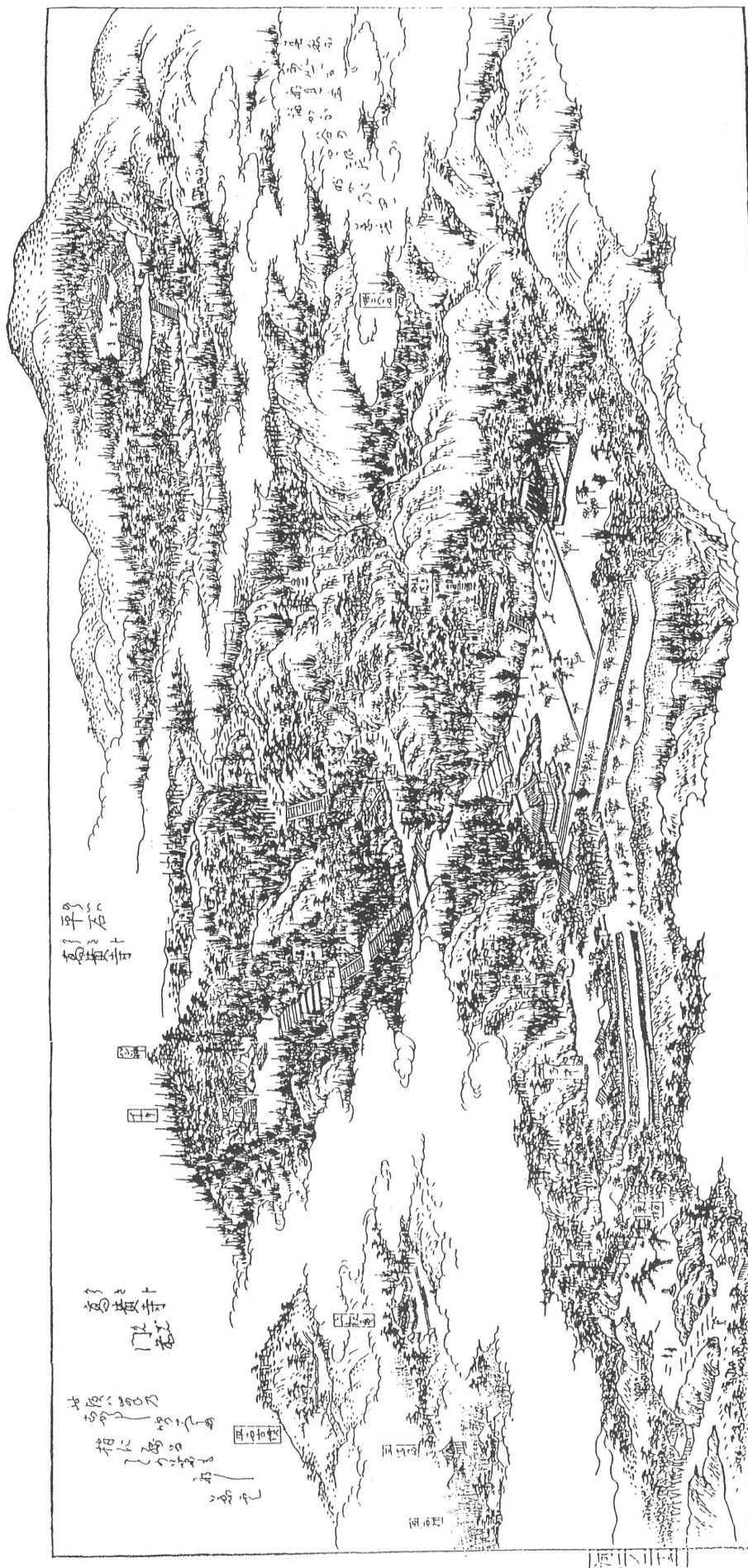
「菖蒲谷」山塊北斜面の棚田に設定した調査区のうち最も高い位置にある第9区では中世耕土より比較的多くの遺物が出土している。10世紀中頃～14世紀代の土師質小皿や瓦器碗などの破片である。中世耕土層より出土する土器が摩滅の度合いが強い傾向からすると比較的残りがよい。この地点の棚田造成の時期を考える手掛かりを与えてくれる。

右岸では、第38～40区で掘立柱建物のピットが検出された。棚田造成による開墾の影響を受けてわずかに2間四方を復元できたにすぎないが、周辺には綠釉陶器碗、黒色土器、瓦器碗などを出土するピットも集中し、9～10世紀以来この地点が平石の集住範囲にあったことは明らかである。また建物遺構を厚く覆う中世の棚田造成土はそれ以後の開墾の状況を物語る。これより西の谷地形の斜面に設定した第37区では、8世紀後半から9～10世紀の土師器、黒色土器などが15世紀の瓦質土器とともに溝の埋土から出土した。溝を埋め立てた後に耕土層（客土）が累積していた。斜面地の棚田造成作業の様子が窺われる。

以上の調査区は平石峠に至る街道を境として谷への南斜面にあたり、至近に「大門」、「舍利」、それより西の谷地を挟んで「坊ノ尻」の小字名が、また街道北側の居宅の密集する尾根には「堂ノ前」、「堂ノ東」、「堂ノ西」、「中垣内」などの小字名が散見する。奈良前期の創建になり平安時代の早い時期に真言密教寺院としての体裁が整えられた高貴寺の旧寺域は、上記の小字「大門」付近より拡がっていたが、正平15年（1360）將軍足利義詮の楠木攻めの際一帯の堂塔の多くが焼亡し、以後はその跡地も含めて活発に開墾が行われ、耕地が広げられていったといわれる（第22図）。その結果、今見る景観が形成された。このような平石地区の変遷が今回からうじて残っていた遺構や棚田造成の堆積土そしてそれらから出土した遺物に反映されていると考えられる。

山から谷に向って張り出す尾根、尾根と尾根の間の谷、そのいずれの地形も設定した調査区で捉えることができた（調査区位置図にトーンで示しているのは谷地形）。棚田は尾根にも谷にも古くから造成されてきた。尾根の場合は傾斜面を削って段状に狭隘な平坦地を確保していく。一方、谷地形の場合は何度も土砂が山手より流れ下って埋没し、それによってある程度安定した傾

第22図 『河内名所図会』所収の高貴寺周辺図



斜面が形成されると、そこにも開墾の手が入る。そのような谷地の棚田は下層が砂、粘土などで常に水を含んでいる。そして谷地である以上、棚田造成後も雨季に出水があると、再び流れ下る土砂に覆われる。するとまたその上に客土して新たに田を作る。その際には古い田の耕土や床土、新たな開墾で削った地山の土がそれらの客土に混じることもある。そのような土砂堆積の繰り返しは特に谷地形に設定したトレンチで普通に観察される。

棚田造成の障害となるのは石である。石の処理は大変な労力を費やしたに違いない。平石川の上流にあたるこの地区では下流の加納地区に比べて地表に露出する石が目立ち、しかも大きい。中には岩の一部が露呈している。平坦な耕地を造成するにはこれらの石は取り除かなくてはならない。手で運べるような石は取り除いて棚田の段差の石垣に用いることもできるが、1mを優に越えるような大きい石は周囲を掘り下げて、床土レベル以下に埋め込んだり、それもできないような砂質で石を多く含む締まった地山のところでは、石や岩を床土レベルあたりまで割って低くする。また石の周囲で檍炭などを焚いて表面を熱しておいてから水を掛け、急速に冷やして亀裂が生じ脆くなったところを打ち欠いて小さくしていく。そんなことをせずに石を谷地の斜面に落とせばよいようにも思うが、谷に下る斜面地も徹底的に棚田化されていくから単純に落とすわけにもいかない。また出水のとき狭い川の流れを妨げることにもなりかねない。地元の人々の間に今も伝わる明治以後の土石流に見舞われた災害の歴史を知るだけでもこのことはあきらかである。

以上のようにみると、平石遺跡の範囲では住まう場所と生産する場所は地形の制約からいってはっきりしていた。住まう場所としては右岸の尾根上以外に求められない。現在では旧谷地形にあたるところにも家屋が建っているが、その基盤となる土砂の堆積層より中世遺物が出土することから考えて、少なくとも中世では谷地形は耕地以外の利用は考えられない。したがって生産の場所としては右岸の谷地形、そして左岸は日当たりの関係もあり、尾根も谷地もすべて耕地として利用されてきたといえる。古くは高貴寺の門前の坂道を上がった尾根の高台に家があり、そこから現在のように低いところへ移ったと地元では伝えている。確かにその高台には今も畑地にかつての宅地跡が点在し、小字も住まいの場所を示すような名前が集中している。このこともこの地区的以前の居住範囲を考える根拠のひとつになるかもしれない。

最後に、当地区で耕地が開発され始めるのはいつ頃かという問題がある。平石谷のこれまでの調査では8世紀代の遺物がどの地点でも出土し、一部にはかなり集中的に投棄されたこの時期の遺物を含む土層も検出した。もちろん、中世の活発な棚田造営により客土として二次堆積したことは否めないが、中世以前にも平石谷一帯でその前段の開発が進められていた可能性は大きいといわざるを得ない。平成15年に高貴寺奥の院の測量調査が大谷女子大学によって行われ、その際奈良時代後半の須恵器甕体部片が発見されている。奈良前期の創建と伝える高貴寺の境内で出土したことは注意されるが、平石谷開口部から平石集落まで実施してきた調査で必ずと言ってよいほど同時期の土師器・須恵器が出土している点も考慮すると、高貴寺の存在と耕地開発とは一体のものとして考えなくてはならないようである。

参考文献

大阪府教育委員会1987年『歴史の道調査報告書 第三集 長尾街道・竹之内街道』

大阪府教育委員会2000年『平石地区・桐山地区発掘調査概要』

河南町誌編纂委員会1968年『河南町誌』

河南町2004年『続河南町誌』

中世土器研究会1990年『概説 中世の土器・陶磁器』

大谷女子大学文学部文化財学科2005年『神下山 高貴寺 - 文化財調査報告書 -』

河内名所図会

最後になりましたが、現地調査に参加し、寒暑にめげず頑張っていただいた庵ノ前智博、佐藤三和子、原田亮子の諸氏に心より感謝申し上げます。また整理作業に助力いただいた宇沢ヒデ子、大上馨、川東貴子、八柄あさ代、山田洋子の皆さんに御礼申し上げます。

第4表 出土土器・土製品観察表

挿図番号	器種	出土個所	層位ほか	法量(cm)				特徴	時期
				口径	底(高台)径	器高	その他		
1	古式土師器甕 口縁部	2区	3層	(17.8)			頸基部径 (14.2)	口縁端部肥厚し、内側にわずかに面をなす。	布留式期
2	須恵器甕	2区	8層	23.8		49.5	頸基部径 (17.5) 体部 最大径 (48.2)	球形の体部からゆるやかに口頸部が外反し、上方ではさらに外方に若干屈曲して口縁部となる。口縁端部外面には一条の凸線が巡り、端部はやや上向きとなって丸くおさめる。体部最大径は器高全体の中位やや上にある。口縁部～口頸部は内外面回転ナデ、体部外面平行タタキの後、スリケシナデ、内面は頸部以下底部付近まで丁寧にスリケシナデを施し、成形時のタタキ目はまったく消失しているのに対し、器壁がより厚みを増す底部では同心円タタキと思われる痕跡を留める。外面は淡青灰色、内面は淡赤紫色を呈する。	陶邑I - 1
3	須恵器壺蓋	2区	4～18層	(17.5)				平たい天井部から下方に屈曲する端部につづく。	陶邑IV - 2～3
4	須恵器甕頸部 ～体部	2区	1～4層				頸基部径 (14.8)	頸部内外面回転ナデ、肩部にかけて平行タタキの後カキメ。内面頸部以下回転ナデの後ナデ、その下方に円弧タタキ。	陶邑III～IV
5	須恵器甕または壺口縁部	2区	4～18層	(19.0)				断面方形に肥厚する。	陶邑II - 2～III - 2
6	須恵質鉢口縁部	2区	4～18層	(27.3)				内外面回転ナデ。端部外面自然釉。東播系鉢。	12世紀末～13世紀初
7	黒色土器底部	2区	15層(西壁断面)		(6.8)			低い高台を付す。見込みヘラミガキ。外面高台部ヨコナデ。底面ナデ。内面のみ漆黒のA類椀	9世紀末～10世紀初
8	瓦器椀底部	2区	2層(北壁断面)		(5.7)			三角形高台が付く。	II - 1～3
9	土師質小皿	2区	4～18層	(7.6)				口縁部1段ナデの低い器。立ち上がりやや外反。	11世紀後半
10	土師質小皿	2区	2層(北壁断面)	(7.7)				口縁部1段ナデの低い器。立ち上がりやや外反。	11世紀後半
12	土師質羽釜口縁部	1区	6～10層	(28.9)				内傾し、外側に段をなす口縁部。口縁直下に鍔を付ける。内外面ヨコナデ。和泉C型。	13～14世紀
13	瓦質羽釜口縁部	1区	6～10層					外側に段をなす口縁部直下に鍔が付く。	15世紀
14	土師質小皿	3区	1～5層	(7.7)				口縁部1段ナデの低い器。立ち上がりやや外反。	11世紀後半
15	土師質小皿	5区	9層	(9.2)				「て」の字状口縁を呈する。外反弱く器壁厚い。	10世紀中頃
16	瓦器椀	5区	9層	(11.8)				口縁部内外面ヨコナデ。外面口縁部以下指オサ工。内面太く粗いミガキが部分的に施される。	III - 3～IV - 2
17	須恵器壺身	6区	2, 6, 9, 13層	(9.6)				平たい底部から外反する口縁部がつづき、端部は丸くおさめる。内外面回転ナデ。	陶邑IV
18	古式土師器甕 口縁部	6区	3層	(12.5)			頸基部径 (10.5)	口縁端部肥厚し、内側にわずかに面をなす布留式甕。	布留式期
19	土師質擂鉢口縁部	6区	1, 5, 12層					内傾する口縁端部はやや肥厚する。内面おろし目。	15世紀中頃
20	瓦器椀底部	6区	2, 6, 9, 13層					器壁が薄い。見込みに太いミガキを粗く施す。	IV - 3～4
21	陶器碗底部	6区	3層		4.7				
22	土師質小皿	8区	4, 6層	(7.5)				口縁部1段ナデの低い器。立ち上がりやや外反。	11世紀後半
23	須恵質鉢口縁部	8区	12～14層	(18.0)				口縁端部外面～内面全体回転ナデ。外面口縁端部以下ヘラケズリ。	14世紀後半
24	須恵質鉢底部	9区	4層					内面回転ナデ、外面ナデ、底部外面未調整。	
25	須恵質鉢	9区	4層					外面回転ナデ、内面ナデ。	12世紀末～13世紀初
26	土師質小皿	9区	4層	(7.9)				「て」の字状口縁を呈する。外反弱く器壁厚い。	10世紀中頃
27	土師質小皿	9区	4層	(7.8)				「て」の字状口縁を呈する。外反弱く器壁厚い。	10世紀中頃
28	土師質小皿	9区	4層	(7.7)				「て」の字状口縁を呈する。外反弱く器壁厚い。	10世紀中頃
29	土師質小皿	9区	4層	(7.6)				口縁部1段ナデの低い器。平らな底部から内湾氣味に立ち上がり、端部はつまんで細く仕上げる。	11世紀前半
30	土師質小皿	9区	4層	(7.6)				口縁部1段ナデの低い器。立ち上がりやや外反。	11世紀後半
31	土師質小皿	9区	4層	(9.8)				口縁部2段ナデの低い器。	11世紀前半

32	土師質小皿	9区	4層	(9. 5)			「て」の字状口縁を呈する。外反弱く器壁厚い。	10世紀中頃
33	土師質小皿	9区	4層	(9. 5)			口縁部2段ナデ。内湾の程度弱く端部丸い。	10世紀中頃
34	土師質甕口縁部	9区	4層	(26. 8)			肥厚する口縁端部が強く内傾する。	15~16世紀
35	瓦器椀口縁部	9区	4層	(10. 7)			小型化した器。内面に太いミガキを粗く施す。外面指オサエ。	IV - 3~4
36	瓦器小皿	9区	4層	(7. 8)			底部からわずかに屈曲して口縁部が斜上方にのび、端部がわずかに外反する。口縁部内外面ヨコナデ、内面に密にミガキ。	III - 2~3
37	瓦器小皿	9区	4層				口縁部1段ナデの低い器。口縁部外反する。	11世紀前半
38	瓦器ミニチュア釜	9区	4層	(4. 9)			内湾する厚い器壁の体部に短く外折する口縁部がつく。口縁端部は細く仕上げる。内外面とも摩滅のため調整不明。	
39	瓦器小椀	12区	1~3層	(7. 8)			口縁部が内湾する立ち上がりの、深みのある器。内面には横方向の細かいミガキを重ねる。外面は器表面摩滅して不明。	
40	土師質小皿	15・16区	7~8層	(7. 2)			口縁部1段ナデ。器壁は厚い。平たい底部から短くのびる口縁端部を丸くおさめる。	1世紀後半
41	土師質小皿	15・16区	7~8層	(8. 4)			やや小さい底部から口縁部が屈曲後、外湾しながらのびる。端部は尖り気味。	14世紀
42	土師質小皿	15・16区	7~8層	(7. 8)			口縁部1段ナデの低い器。立ち上がりやや外反。	11世紀後半
43	土師器甕口縁部	15・16区	7~8層	(15. 6)			口縁端部が外端面をなし、上部がわずかにつまみあげる。口縁部外面ヨコナデ、内面横方向のハケメ。	7世紀後半~8世紀
44	施釉陶器盤	15・16区	7~8層	(20. 2)	1. 1		体部から屈曲する肥厚した口縁部が付く。内外面に暗褐色釉がかかる。美濃焼。	13~14世紀
45	土師質小皿	18区	11層（西壁断面）	(7. 3)			口縁部1段ナデの低い器。器壁は厚く、平たい底部から短い口縁部がのびる。	11世紀前半
46	土師質小皿	26区	3~4層				口縁部1段ナデの低い器。立ち上がりやや外反。	11世紀前半
47	土師質鉢口縁部	28区	3~6層（旧谷筋流土）	(16. 6)			端部肥厚し上下に拡張する。	15世紀
48	土師質小皿	28区	3~6層（旧谷筋流土）	(10. 9)			口縁部1段ナデ。直線的にのびる口縁端部は丸くおさめる。底部指オサエ。	10世紀末~11世紀初
49	土師質深鉢口縁部	28区	3~6層（旧谷筋流土）				直立する口縁端部が肥厚しわずかに外反する。口縁端部内外面ヨコナデ、以下外面指オサエ、内面ナデ。	中世
50	土師質深鉢口縁部	28区	3~6層（旧谷筋流土）				直立する口縁端部肥厚しわずかに外反する。口縁端部内外面ヨコナデ、以下外面指オサエ、内面ナデ。	中世
51	土師質羽金鐔部	28区	3~6層（旧谷筋流土）				外面ナデ、内面横方向ヘラケズリ。	
52	土師質羽金鐔部	28区	3~6層（旧谷筋流土）				内傾する口縁部の外側に鐔が付く。和泉B型。	13~14世紀
53	瓦器椀底部	28区	3~6層（旧谷筋流土）		12, 3		粘土紐を貼り付けただけの形骸化した高台がつく。内面粗いミガキ。	IV - 2
54	土師器椀または皿底部	31区	1層	(11. 7)			断面方形の高台が底端部につく。	
55	土師器坏口縁部	31区	1層	(18. 5)			外反する口縁部。口縁端部を上下に拡張する。内外面ヨコナデ。	
56	須恵質鉢口縁部	31区	1層	(24. 0)			口縁端部を上下に大きく拡張し、くの字状の縁帶をなす。	14世紀前半
57	土師質皿	31区	3層	(14. 0)			口縁部2段ナデ。端部をつまみ上げる。	10世紀後半
58	土師質甕口頸部	31区	4層				内外面摩滅のため調整不明。	
59	陶器鉢口縁部	31区	4層	(26. 4)			口縁端部を上下に拡張する。	14世紀前半
60	土師器甕口縁部	36A区	6~7層（西壁断面）	(28. 2)			やや外反気味にのびる口縁端部が外端面をなす。上端がわずかに立ち上がる。口縁部内外面ヨコナデ、他はナデ。	8世紀
61	土師質小皿	36B区	2層（南壁断面）	(7. 8)			口縁部1段ナデ。外反し端部丸く仕上げる。	11世紀末
62	土師質小皿	36A区	6~7層（西壁断面）	(7. 6)			口縁部1段ナデ。器高極端に低く、立ち上がりは外反する。	11世紀前半
63	瓦器椀口縁部	36A区	6~7層（西壁断面）	(11. 7)			口縁部内外面ヨコナデ。外面口縁部以下指オサエ。内面太く粗いミガキが部分的に施される。	III - 3~IV - 2
64	瓦器椀口縁部	36A区	6~7層（西壁断面）	(13. 5)			器壁の薄い器。内外面ヨコナデ。	IV
65	須恵器坏蓋	37区	13層（西壁断面）	(16. 0)			天井部から口縁端部にかけてゆるやかにZ字状を描き端部下方に屈曲する。	陶邑IV - 3~4
66	土師質皿	37区	13層（西壁断面）	(13. 8)			口縁部1段ナデ。口縁部は外反してのび端部は丸く仕上げる。底部外面指オサエ。	11世紀末

67	土師器坏	37区	13層（西壁断面）	(15. 4)	6. 0	4. 4		丸底の底部から外上方へ直線的に開く口縁部をなし、端部を丸くおさめる。口縁部内外面を強くヨコナデ。体部から底部にかけて指オサエの痕跡顯著。	9世紀末～10世紀初
68	土師器甕	37区	13層（西壁断面）	19. 4			頸基部径 16. 7	口縁端部は肥厚し内傾する。口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面指オサエの後ナデ。	8世紀後半～9世紀
69	土師質羽釜口縁部	37区	13層（西壁断面）	(30. 0)			鍔部径 (37. 2)	内傾する体部から外折する口縁部が付く。口縁端部はわずかに上につまみ上げ、外端面をなす。鍔部は口縁部に近く水平に付き、端部は細くまとめる。口縁部内外面、鍔部上面ヨコナデ、体部外面は横方向の粗いヘラケズリ。大和B型釜。	9～10世紀
70	黒色土器椀	37区	13層（西壁断面）	(18. 8)				内窩気味に立ち上がる口縁部はその端部がわずかに小さく外反する。口縁端部内外面ヨコナデ、体部外面左から右へヘラケズリし、器壁は薄い。調整は摩滅のため不明瞭だが、一部にヘラミガキ残る。A類椀。	10世紀
71	黒色土器椀	37区	13層（西壁断面）	(13. 8)	(5. 9)			内窩気味に立ち上がる口縁部はその端部をやや細く丸くおさめる。内面は横方向に密にミガキを重ね、見込みは平行ミガキを密に重ねる。外面口縁部以下指オサエの後ナデ。底部には小さく低い高台を付す。A類椀。	10世紀後半
72	瓦質擂鉢	37区	13層（西壁断面）	(25. 9)				肥厚する口縁端部がやや内傾し、外端面をなす。摩滅のため調整は不明瞭だが、口縁部内面を横方向にハケメ、以下は縦方向におろし目を入れている。	15世紀
73	土師質小皿	42区	1層	(8. 0)				口縁部1段ナデ。弱く外反し端部丸い。	10世紀末～11世紀初
74	土師質小皿	42区	1層	(7. 7)				口縁部1段ナデ。器高の低い器。立ち上がり外反する。	11世紀前半
75	磁器碗	43区	現耕土		4. 5			梅樹文。緑味白色。疊付露胎。波佐見窯系碗。	18世紀
76	土師質小皿	44B区	現耕土	(7. 9)				口縁部1段ナデ。器高の低い器。立ち上がりやや外反。	11世紀後半
77	土師質小皿	44B区	現耕土	(8. 0)				口縁部1段ナデ。器高の低い器。立ち上がりやや外反。	11世紀後半
78	須恵器甕または壺口縁部	45区	3～6層					口縁端部肥厚し、内側に内方させる形。	陶邑III
79	須恵質鉢	45区	3～6層	(25. 9)				口縁端部上下に拡張し、口縁帶となる。端部外面に自然釉。東播系。	13世紀
80	土師質小皿	45区	3～6層	(7. 9)				口縁部1段ナデ。器高が低い器。口縁部の立ち上がり外反する。	11世紀前半
81	土師質小皿	45区	3～6層	(7. 7)				口縁部1段ナデ。立ち上がり内窩気味。	11世紀後半
82	須恵器坏蓋	40区	中世棚田造成以前遺物包含層	(14. 4)				平らな天井部。端部は下方へ屈曲させ、天井部から端部にかけてゆるやかなZ字状のカーブを描く。天井部外面へラキリの後ナデ、口縁部内外面は回転ナデ。内面中央付近は不定方向のナデ。	陶邑IV - 3～4
83	須恵器坏	39区 ピット18	暗褐色粘質土	(14. 0)				なだらかにやや内窩気味にのびる口縁部。端部は外にわずかに折り返す感じ。器壁は薄く、マキアゲ、ミズビキ成形による凹凸が残る。	陶邑V
84	須恵器皿	40区	中世耕土	(18. 0)				稜角をなす平たい底部から口縁部が外斜方に直線的にのびる。端部は上端面をなす。口縁部内外面回転ナデ、底部外面回転へラケズリ。	陶邑IV
85	須恵器壺底部	40区	中世棚田造成以前遺物包含層		(12. 5)			平たい底部から外斜方に直線的にのびる体部をもつ。底体部端に低く小さな高台が付く。外面上半回転ナデ、下半回転へラケズリ。肩の張る壺の体部か。	陶邑IV
86	須恵器壺体部	38～40区	4～18層				体部最大径 14. 1	体部はなだらかにカーブを描く。外面上半回転ナデ、下半回転へラケズリの後、一部にナデを施す。内面回転ナデ。肩部上半に2条の沈線巡る。	陶邑IV
87	須恵器壺底部	38～40区	中世耕土		4. 3			八の字形の高台が底端部に取り付く。内外面回転ナデ。	陶邑IV～V
88	須恵器壺または甕頸部	38～40区	排土					内外面ナデ、頸部以下円弧タタキ。	
89	須恵器甕体部	40区	中世棚田造成以前遺物包含層					外面格子状タタキ、内面円弧タタキ。	
90	須恵器甕体部	38～40区	中世耕土					外面平行タタキの後一部ナデ、内面円弧タタキの後一部ナデ。	
91	須恵器円面硯	38～40区	中世耕土					やや外反する外堤部から陸部にかけての破片。表面全体にナデ、裏面のナデは雜。	8～9世紀

92	須恵質雜器	38~40区	中世耕土				厚さ1.5cmの板状の器体の片面に高さ0.6~0.7cm程度の隆起帯をめぐらせ、その内側の平面を画している。この隆起帯の面は灰被りとなる。画された内側の平面は擦り痕が認められ、この面には焼成後に鋭利な刃物により0.5~0.7cm間隔で線が刻まれている。それと直交する線は浅く細い。風字硯または瓦塔の可能性もある。	
93	須恵器鉢底部	40区	中世耕土				底部糸切り、底部～体部外面粘土紐継ぎ足し後ナデ。内面板状工具によるナデ。	
94	須恵器底部	38~40区	中世耕土	(11.0)			壺、鉢などの底部か。摩滅のため調整不明。	
95	土師器坏蓋	40区	中世棚田造成以前遺物包含層			つまみ径2.5つまみ高1.2	平坦な頂部と丸い縁部からなる。頂部中央に上面がわずかに凹む扁平なつまみを付す。天井部は分割して密にヘラミガキを施す。	平城II～III
96	土師器坏蓋	40区	中世棚田造成以前遺物包含層				平坦な頂部と丸い縁部からなる。天井部は分割して密にヘラミガキ。	平城II～V
97	土師器皿	40区	中世棚田造成以前遺物包含層	(11.9)			外反する口縁端部が内傾する皿。口縁部内外面ヨコナデ、外面口縁部以下ナデ。	平城II～III
98	土師器坏口縁部	38~40区	中世棚田造成以前遺物包含層				口縁端部を内側に巻き込む。内外面ヨコナデ。	平城II～V
99	土師器坏	39区 ピット39	にぶい黄褐色砂質土	(15.8)			外上方へ直線的に開く口縁部で、端部を丸くおさめる。口縁部内外面を強くヨコナデ。体部から底部にかけて指オサエの痕跡顯著。	9世紀末～10世紀初
100	土師器坏	40区	中世棚田造成以前遺物包含層	(15.8)			内弯する口縁端部が短く外反する楕形。端部は内端面をなす。	平城III～V
101	土師器坏	40区	中世耕土	(13.8)			平たい底部から外斜方に直線的にのびる口縁部。摩滅のため調整不明。	
102	土師器坏口縁部	40区	中世棚田造成以前遺物包含層				口縁部内外面を強くヨコナデ、体部外面に指オサエを残す。	9世紀末～10世紀初
103	土師器坏口縁部	39区 ピット10	褐色粘質土				内弯する弧を描いて立ち上がる口縁部をもつ楕形の器。口縁端部内端面をもつ。	平城III～V
104	土師器皿	39区 ピット24	暗灰黄色粘質土	(12.8)			口縁部内外面ヨコナデ。以下外面指オサエの後ナデ。	
105	土師器皿	39区 ピット24	暗灰黄色粘質土	(14.4)			丸みのある底部から口縁部が外弯するようになびる。口縁部内外面ヨコナデ、底部外面指オサエ。	13世紀
106	土師器皿	39区 ピット25	暗褐色砂質土	(18.9)			口縁端部丸くおさめる。外面ヨコナデ。	
107	土師質小皿	38~40区	中世耕土(断面図示)	(7.6)			口縁部1段ナデ。平たい底部から口縁部が外反して立ち上がる。端部はつまみあげ細い。	11世紀前半
108	土師質小皿	38~40区	中世耕土	(8.0)			口縁部1段ナデ。平たい底部から口縁部が外反して立ち上がる。端部はつまみあげ細い。	11世紀前半
109	土師質小皿	38区 ピット2	暗灰黄色粘質土	(7.9)			口縁部1段ナデ。平たい底部から外反気味に口縁部が立ち上がる。	11世紀前半
110	土師質小皿	38~40区	中世耕土	(7.9)			口縁部1段ナデ。平たい底部から外反気味に口縁部が立ち上がる。	11世紀前半
111	土師質小皿	38~40区	中世耕土	(7.8)			口縁部1段ナデ。器高低い。立ち上がり内弯気味。端部面取りか。	11世紀後半
112	土師質小皿	38~40区 溝5		(7.8)			口縁部1段ナデ。口縁端部丸くおさめる。	10世紀末～11世紀初
113	土師質小皿	38~40区	中世耕土	(8.8)			口縁部1段ナデ。端部丸くおさめる。器壁やや厚い。	
114	土師質小皿	38~40区	中世耕土	(8.6)			「て」の字状口縁を呈する。外反弱く器壁厚い。	10世紀中頃
115	土師質小皿	41区	中世耕土	(9.0)			口縁部1段ナデ。器高低く、外反し、端部つまみ上げる。	11世紀前半
116	土師質小皿	38~40区	排土	(9.8)			口縁部1段ナデ。底部から滑らかに口縁部がのびる。	10世紀末～11世紀初
117	土師質小皿	41区西半部	中世耕土	(9.9)			底部から内弯気味になめらかに口縁部がのび、端部はやや厚みをもって丸くおさめる。白色胎土。口縁部外面ヨコナデ。	15世紀
118	古式土師器甕口縁部	40区	中世耕土	(18.0)			口縁端部肥厚し、内側にわずかに面をなす布留式甕。	5世紀前半
119	土師器甕口縁部	38~40区	中世棚田造成以前遺物包含層				直線的にのびる口縁部で、端部が内側に巻き込む。外面ヨコナデ。	8世紀

120	土師器甕口縁部	38~40区	中世棚田造成以前遺物包含層	(18.0)			頸基部径 (17.1)	口縁部はくの字形に短く外反し、端部上端面をなす。口縁部外面ヨコナデ、頸部以下ナデ。	8世紀
121	土師器甕頸部～体部	38~40区	中世耕土				頸基部径 (16.6)	頸部以下外面指オサエの後縦方向ハケメ、内面に一部ハケメ。内面ヘラケズリの後ナデ。頸部内外面ヨコナデ。	8世紀
122	土師器甕口縁部	38~40区	中世棚田造成以前遺物包含層					口縁端部をわずかに巻き込み、外端面をなす。摩滅のため調整不明。	8世紀
123	土師器甕口縁部	38~40区	中世耕土					口縁端部をわずかに巻き込み、外端面をなす。外面ヨコナデ。	8世紀
124	土師器甕口縁部	38~40区	中世耕土					口縁端部をわずかに巻き込み、外端面をなす。外面ヨコナデ。	8世紀
125	土師器甕口縁部	38~40区	中世耕土					口縁端部をわずかに巻き込み、外端面をなす。外面ヨコナデ。	8世紀
126	土師器甕口縁部	38~40区	中世耕土					口縁部はくの字形に短く外反し、端部上端面をなす。口縁部外面ヨコナデ。	8世紀
127	土師器甕口縁部	38~40区	中世棚田造成以前遺物包含層					口縁部はくの字形に短く外反し、端部上端面をなす。口縁部外面ヨコナデ。	8世紀
128	土師質深鉢口縁部	38~40区	中世耕土	(35.6)				外斜方に直線的にのびる口縁部。端部やや内傾し、上端面をなす。口縁部外面ヨコナデ、以下外面横方向にヘラケズリの後ナデ、内面強く横または斜め方向にナデ。	中世
129	土師質羽釜口縁部	41区	中世耕土					内傾し、外側に段をなす口縁部。口縁直下に鍔を付ける。内外面ヨコナデ。和泉C型。	13~14世紀
130	土師質焙烙口縁部	41区	中世耕土	(35.2)				腰部より上に短い鍔が付く大和系の器。器壁は薄い。鍔部から内面にかけてヨコナデ、鍔部以下外面ナデ。	17~18世紀
131	製塩土器	40区	中世棚田造成以前遺物包含層	(9.9)	5.6			斜上方に開く口縁部。指オサエ痕顯著。	8世紀
132	黒色土器椀	40区 ピット58	にぶい黄褐色 砂質土	(15.1)	8.5	5.1		底部から内弯気味に立ち上がる口縁端部が小さく外反する。高台は高く、八の字形に踏ん張る。口縁部外面へ内面ヨコナデ。体部外面指オサエ後ナデ、高台～底部ナデ。内面を密にミガキ、見込み平行ミガキ。A類椀。	10世紀
133	黒色土器椀	38~40区	中世耕土	(12.9)				やや内弯気味に立ち上がる口縁部で、端部は丸くおさめる。外面に炭素を吸着させた漆黒の器。内外面は密にミガキ。B類椀。	10世紀後半～11世紀前半
134	瓦質鍋口縁部	40区	中世棚田造成以前遺物包含層					内弯気味に立ち上がる口縁端部に厚みがあり、内側に端面をなす。摩滅のため調整不明。	15~16世紀
135	瓦質深鉢口縁部	41区	中世耕土					直立する口縁部は端部で肥厚し、上端面をなす。火鉢か。	中世
136	瓦質鉢口縁部	40区	中世棚田造成以前遺物包含層					斜上方にのびる口縁部で、端部が上端面をなす。	中世
137	瓦器椀口縁部	41区	中世耕土	(13.0)				口縁端部内側に沈線。口縁部外面ヨコナデ。内面ヘラミガキ、体部外面指オサエのみ。	III
138	瓦器椀	38~40区	中世耕土	(13.6)				器高の低い器で、高台がほとんど消失。内面に大きく粗いヘラミガキが断続的に施される。見込みには雑な格子状暗文。体部外面指オサエのみ。	IV - 3~4
139	瓦器椀口縁部	38~40区	中世耕土	(11.7)				器壁の薄い器。口縁部外面ヨコナデ。以下外 面指オサエ。	IV
140	瓦器椀	38~40区	中世耕土	(12.0)	2.5	4.9		丸い底部から内弯気味に口縁部がのびる。退化した小さい高台が付く。摩滅のため調整不明だが、外面は口縁部以下指オサエ。	IV - 2
141	瓦器小皿	38~40区	中世耕土	(8.8)				口縁部1段ナデ。器壁薄く端部細く外反。	III相当か
142	瓦質深鉢口縁部	41区	中世耕土	(44.0)				口縁端部外反し上端面をなす。口縁部外面下端タタキメ、その他は内外面回転ナデ。	中世
145	陶器底部	38~41区	中世耕土		4.3			外面橙色の露胎に一部、内面は全体に灰白色釉が施される。	
146	緑釉陶器小碗	39区 ピット112	にぶい黄褐色 粘質土	9.0	4.8	2.8		内弯気味に立ちがあり端部を外反させる形。釉は全体的に薄くかかるが、外面は剥落が著しい。高台は糸切り無調整の円盤状をなす。	9世紀
147	輪羽口	41区	中世耕土	内径約3.3 外径5.5				外面暗褐色、内面淡赤色に変色。	

写 真 図 版

図版1 調査地点全景（空測写真、俯瞰）



南から



西から

図版2 調査地点垂直写真（平成11年度撮影）（38～40区）



図版3 調査地点垂直写真（平成17年度撮影）（38～40区）





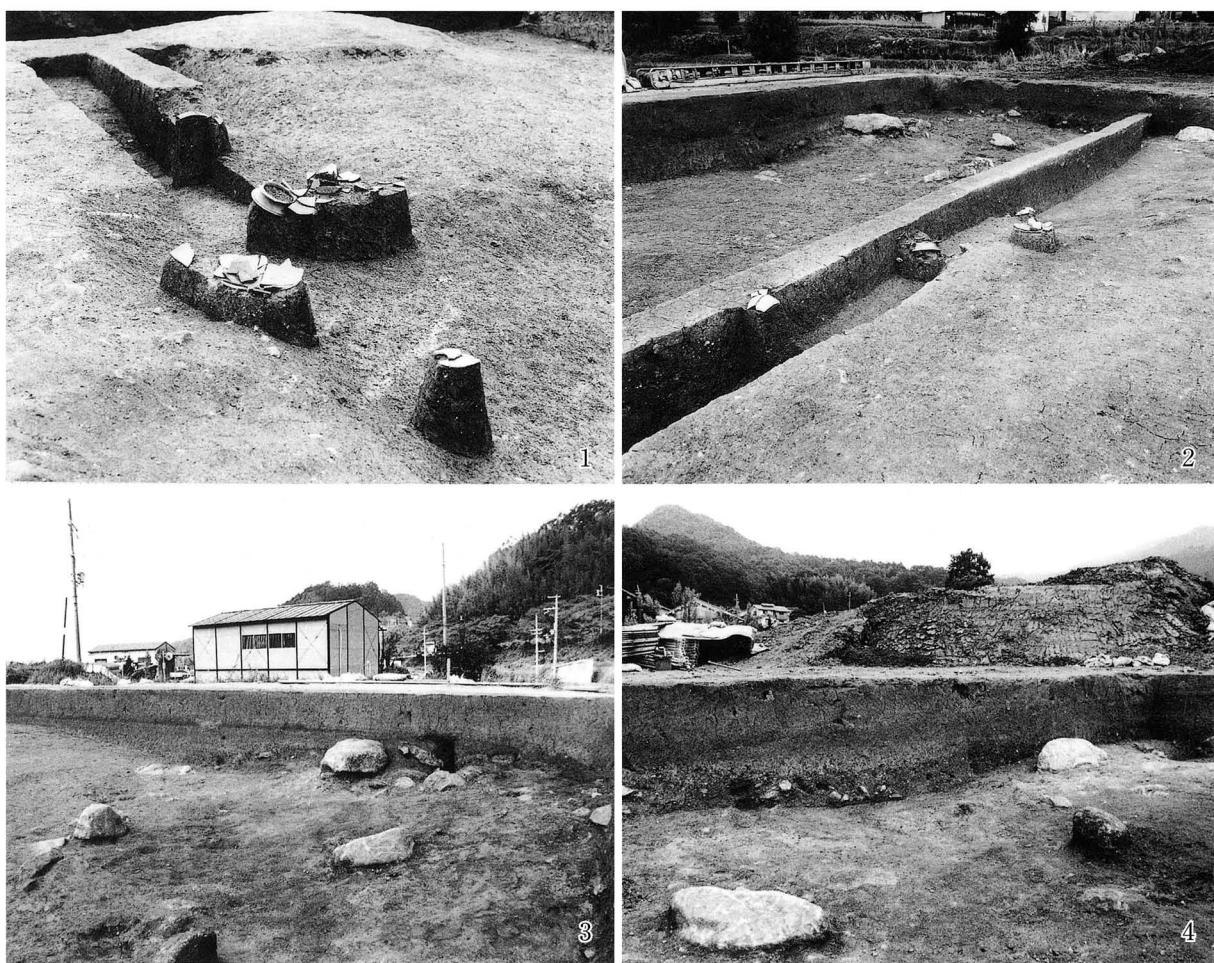
調査地区全景（東から：遠方獄山）



第38-41区全景（南から：「大門」、「舍利」付近）



第2区全景（東から）



遺物出土状況（1 - 南東から、2 - 北東から）、調査区断面（3 - 北壁中央、4 - 北壁東半）



3区 東から



3区 西壁断面



4区 西から



4区 南東から



5区 南から



5区 南東から



6区 南から



6区 南東から



9区 南東から



9区 北東から



10区 南西から



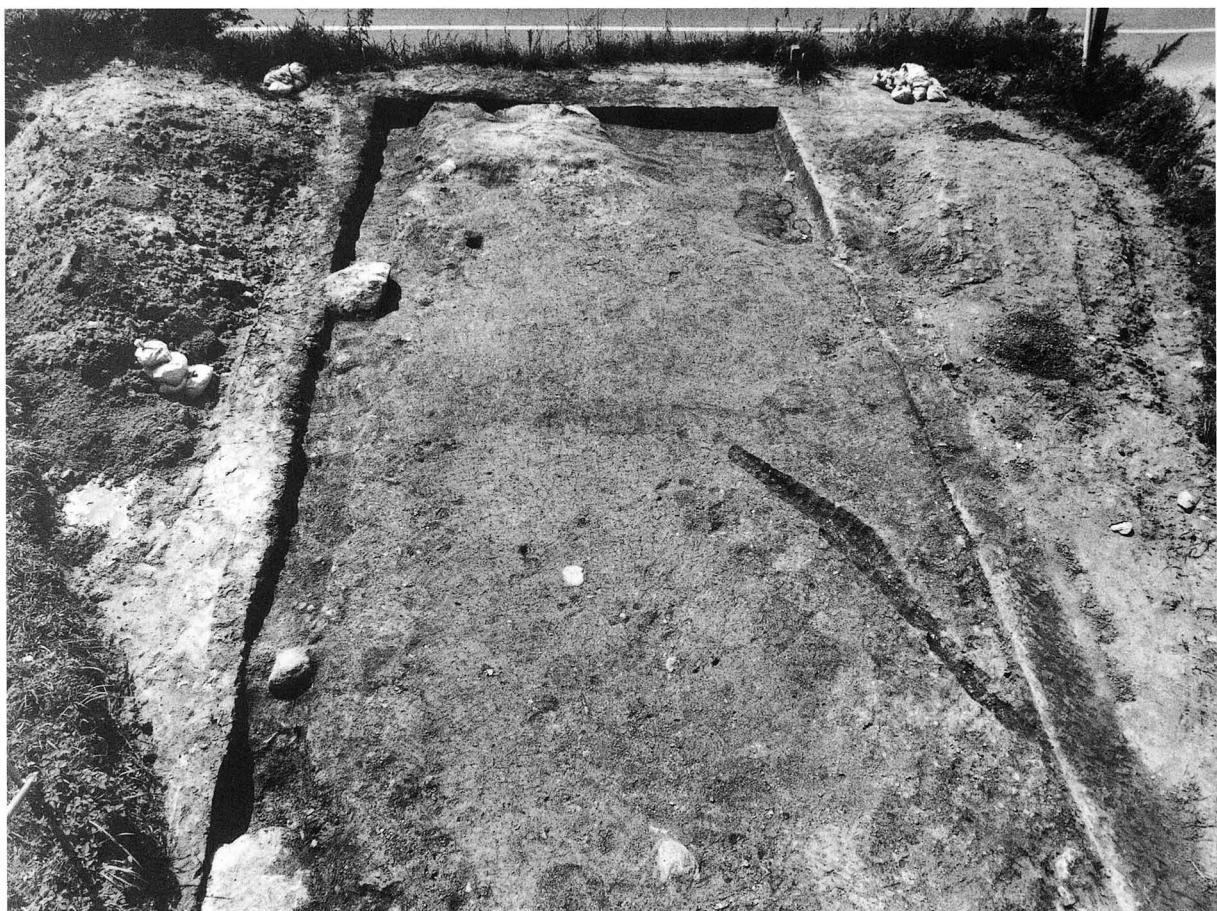
15区 西壁断面（東から）



16区 西から



19区 南壁断面（北西から）



21区 南から



22区 南から



23区 西壁断面（北東から）



23区 北から



31区 北西壁（南東から）



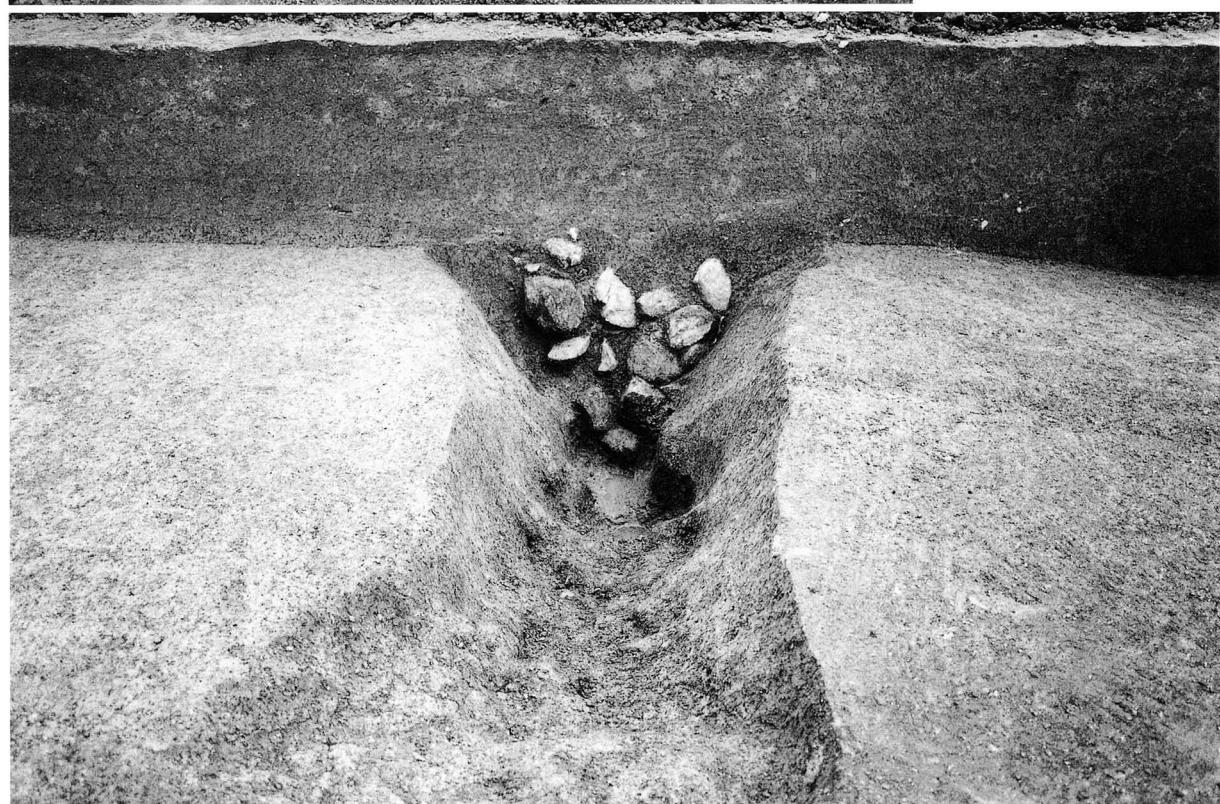
33区 南東から



36-A・B 全景（南から）



36-B 東から





38～41区 全景（西から）

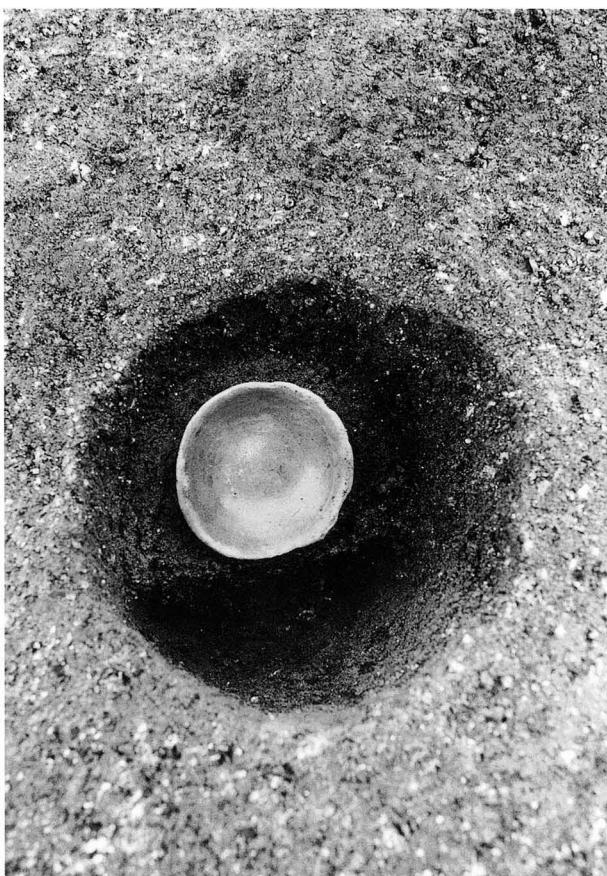


39, 40区 ピット群（北から）





ピット58 黒色土器出土状況（東から）



ピット112 緑釉陶器出土状況（南から）



1 (南から)



3 (東から)



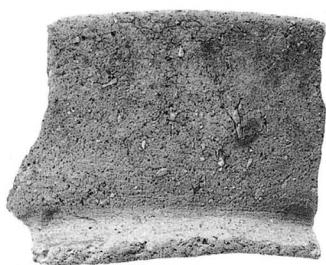
2 (東から)



4 (南から)

土坑9 検出(1), 完掘(2)状況

土坑82 検出(3), 完掘(4)状況



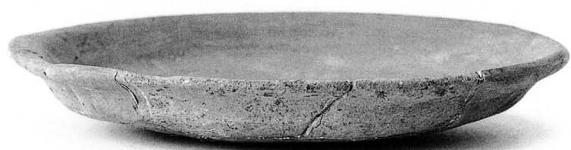
1



2



67



66



132



71



70



7



68



69



146



11



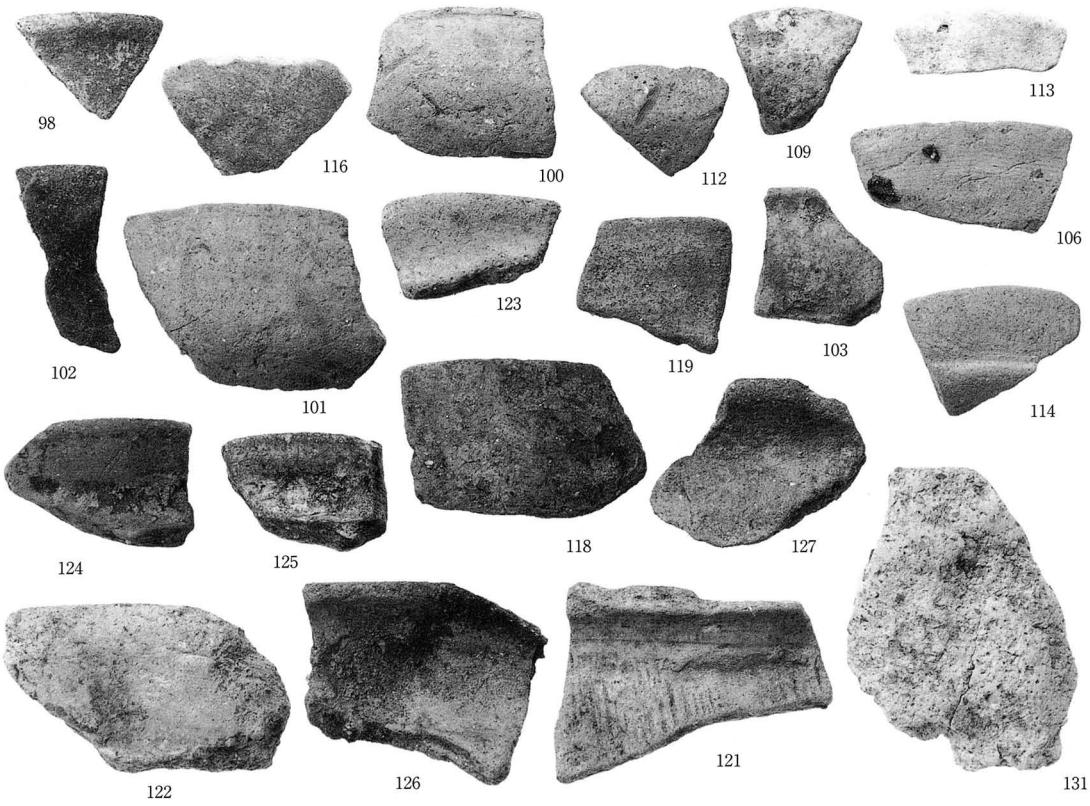
148



149

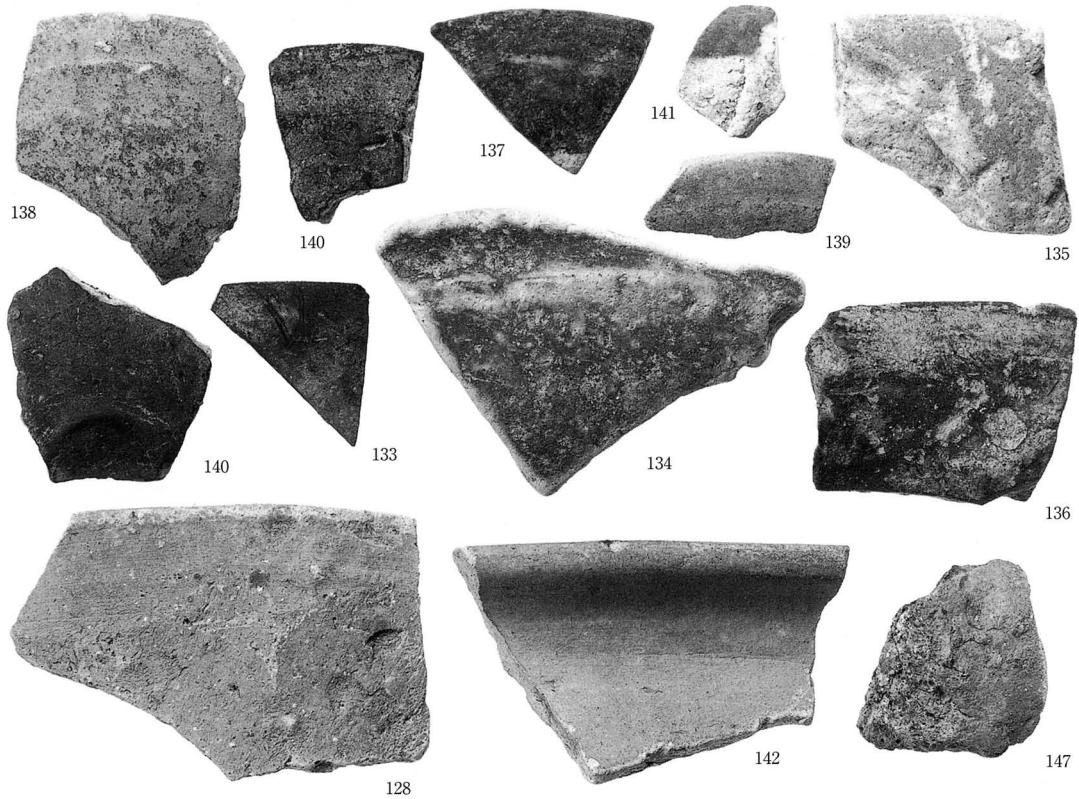


150

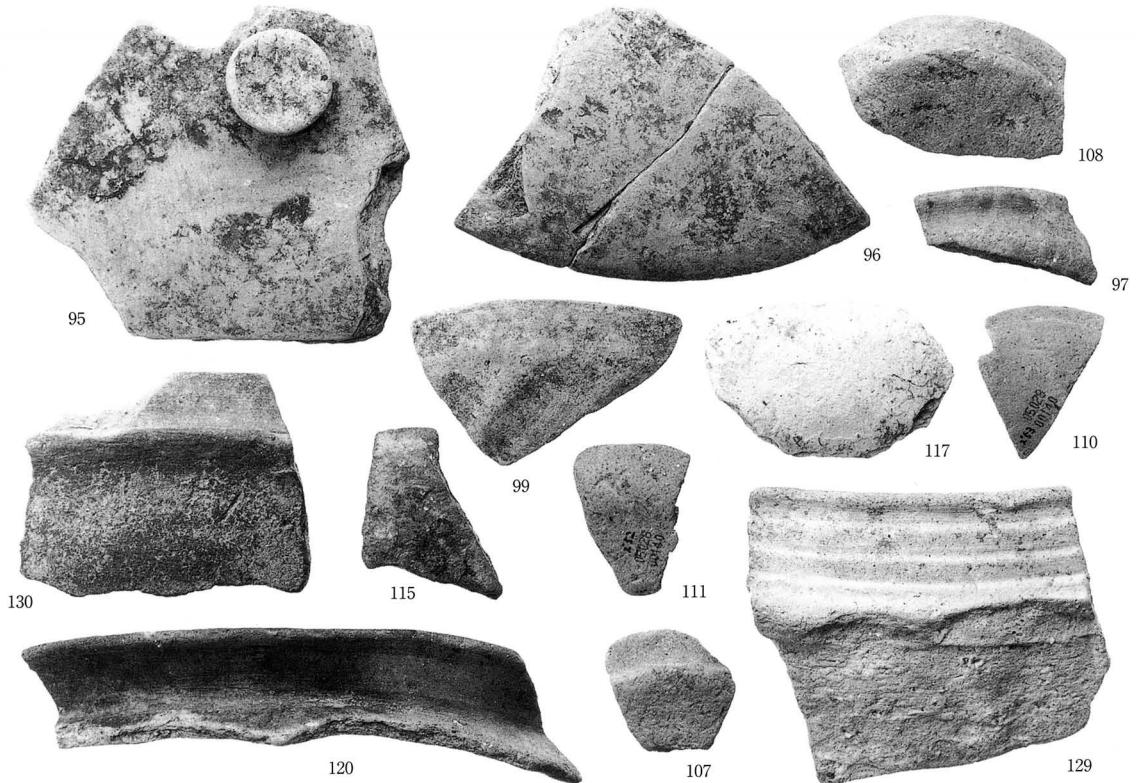


38~41区出土 土師器・土師質土器

図版 23 出土遺物（3）

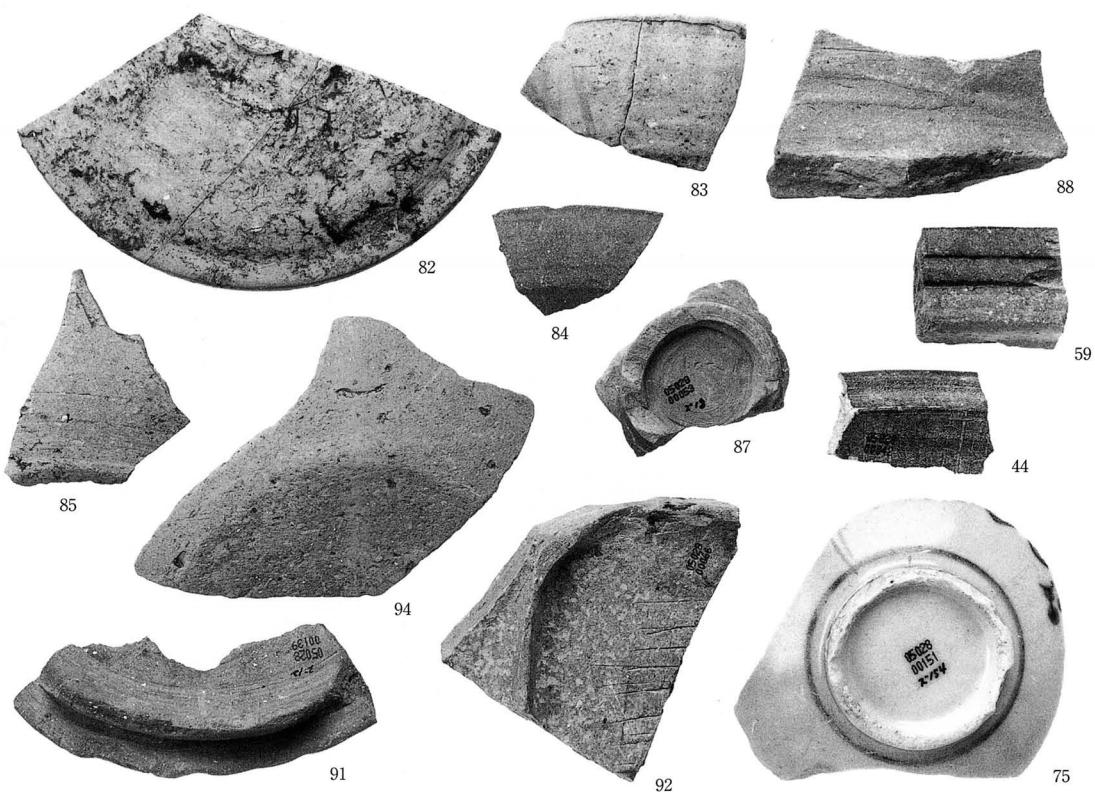


38～41区出土 黒色土器・瓦器・土師質土器・瓦質土器

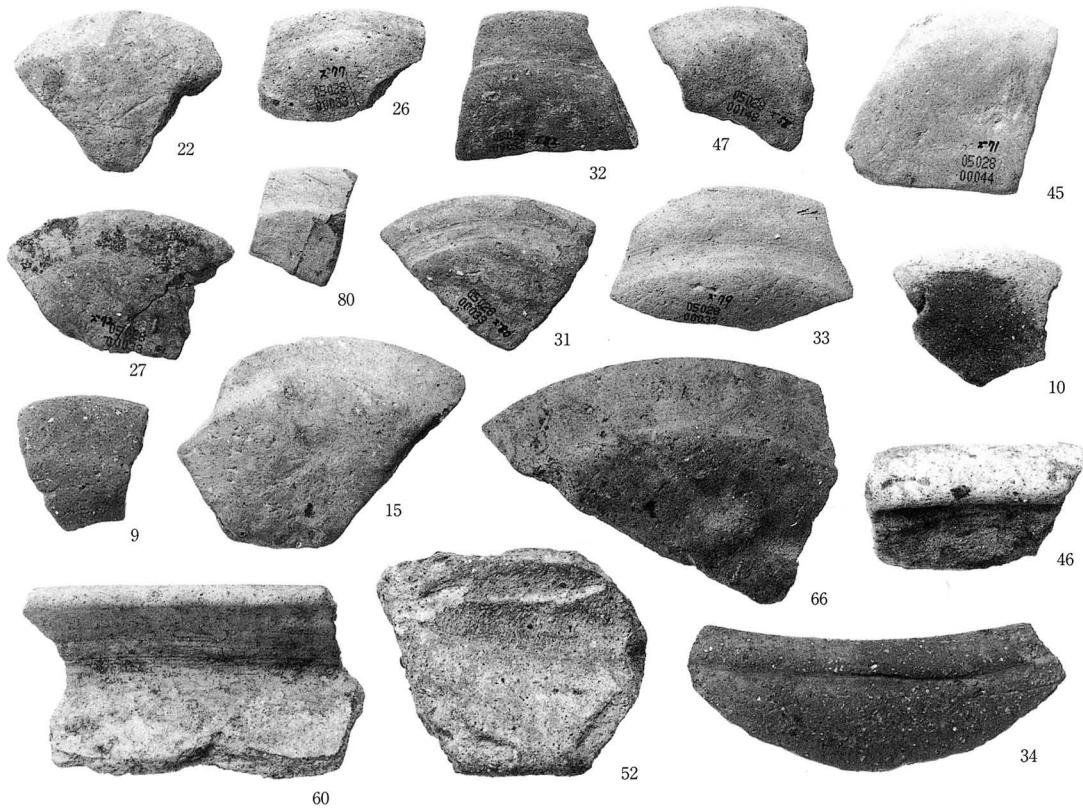


38～41区出土 土師器・土師質土器

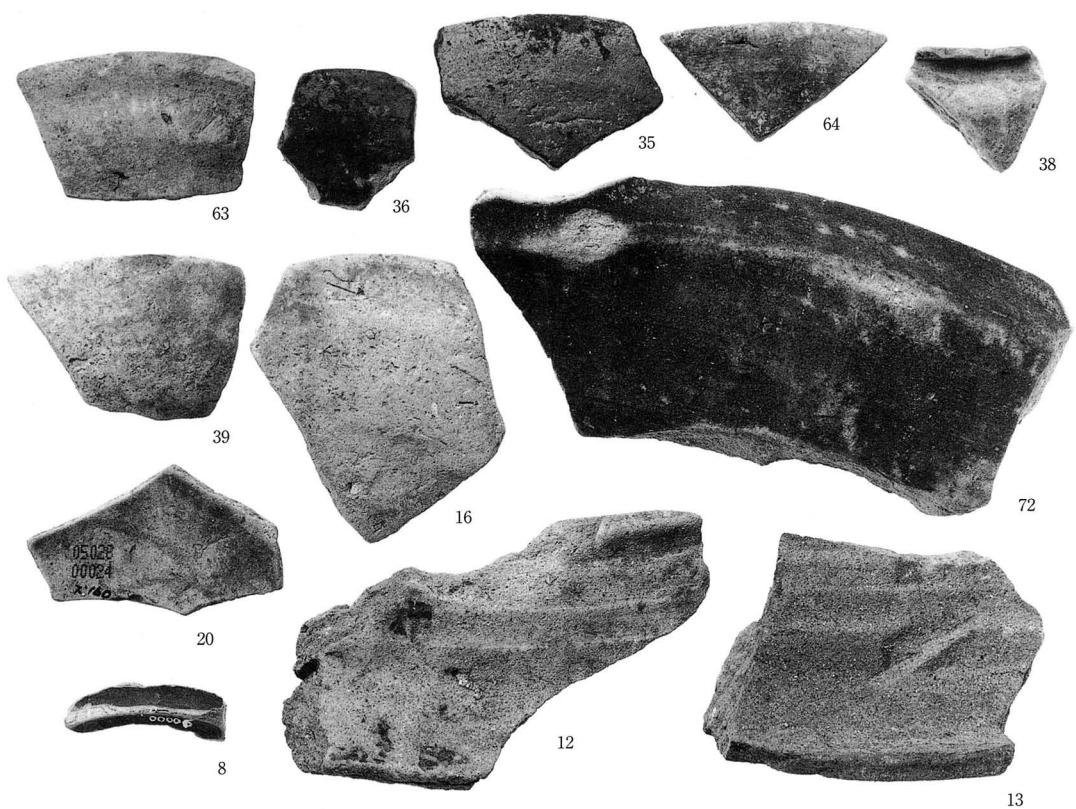
図版 24 出土遺物（4）



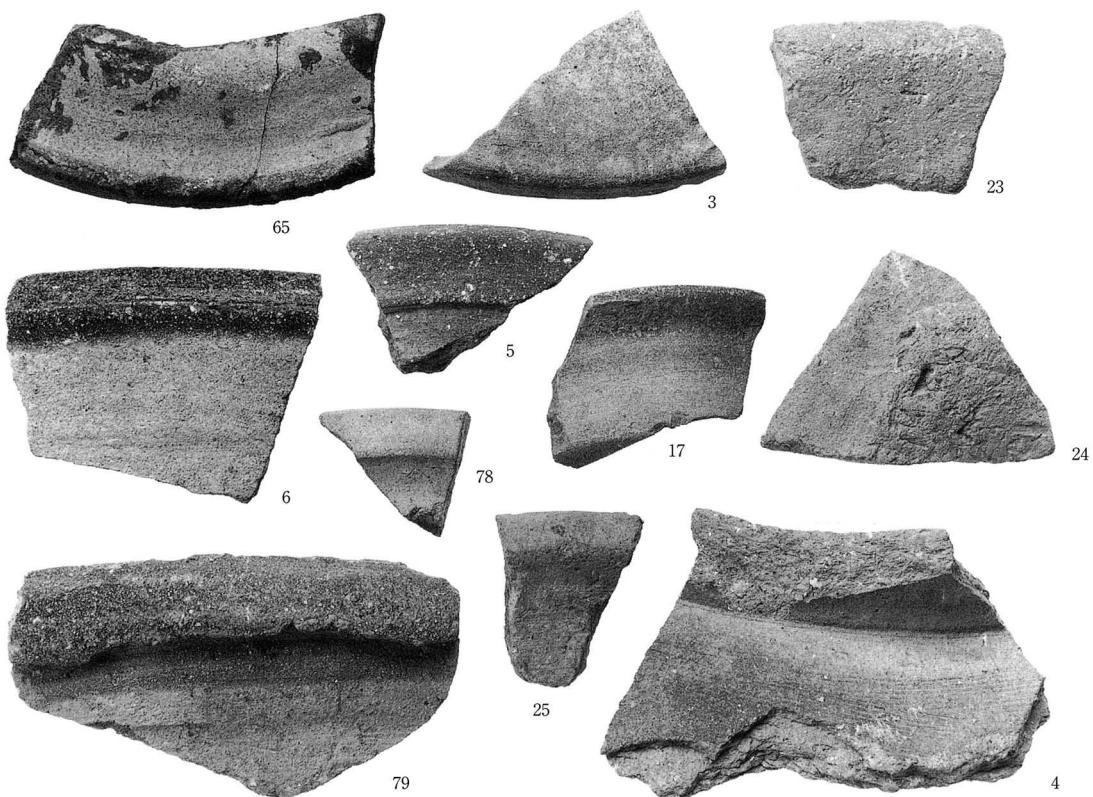
15, 16, 35, 38~41, 43区出土 須恵器・須恵質・陶磁器



2, 5, 8, 9, 18, 26, 28, 36-A, 45区出土 土師器・土師質土器



1, 2, 5, 6, 9, 12, 36-A, 37区出土 瓦器・土師質土器・瓦質土器



2, 6, 8, 9, 37, 45区出土 須恵器

報告書抄録

ふりがな	ひらいしいせきはつくつちょうさがいよう							
書名	平石遺跡発掘調査概要・I							
副書名	中山間地域総合整備事業「南河内こごせ地区」に伴う							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	木本哲							
編集機関	大阪府教育委員会							
所在地	〒540-0008 大阪府大阪市中央区大手前2丁目 TEL 06-6941-0351							
発行年月日	2007年3月31日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 。' "	東経 。' "	調査期間	面積 (m ²)	調査原因
ひらいしいせき 平石遺跡	みなみかわちぐん 南河内郡 かなん ちょう 河南町 ひらいし 平石	27382	53	34° 29' 42"	135° 39' 24"	2005年 8月10日 ～ 2006年 3月31日	4,651 m ²	中山間地域 総合整備事業 「南河内 こごせ地区」
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
平石遺跡	集落	平安時代 ～南北朝 時代	掘立柱 建物	黒色土器・ 緑釉陶器・ 瓦器		高貴寺旧寺域に関連する 建物遺構		
要 約	葛城山西麓から発する平石川の右岸で、高貴寺旧寺域に関連する平安時代～南北朝時代の掘立柱建物を検出し、左岸では中世以降活発となる棚田造成の様子を明らかにできた。							

平石遺跡発掘調査概要・I

- 中山間地域総合整備事業「南河内こごせ地区」に伴う -

発 行 大阪府教育委員会

〒540-0008 大阪市中央区大手前2丁目

TEL 06-6941-0351

発行日 2007年3月30日

印 刷 株式会社 中島弘文堂印刷所

大阪市東成区深江南2丁目6番8号

TEL 06-6976-8761

